WebSphere Business Integration Server
Express and Express Plus

WebSphere Business Integration Server Express インストール・ガイド (Windows 版)

バージョン 4.4

WebSphere Business Integration Server
Express and Express Plus

WebSphere Business Integration Server Express インストール・ガイド (Windows 版)

バージョン 4.4

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、 91 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.4 および IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus バージョン 4.4 に適用されます。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

http://www.ibm.com/jp/manuals/ の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原　典： WebSphere Business Integration Server Express and Express Plus WebSphere Business Integration Server Express Installation Guide for Windows Version 4.4

発　行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担　当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2005.5

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財) 日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2004, 2005. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2005

目次

本書について v
対象読者 v
関連資料 v
表記上の規則 vi

本リリースの新機能 vii
リリース 4.4 の新機能 vii
リリース 4.3.1 の新機能 vii
リリース 4.3 の新機能 vii

第 1 章 インストールの概要 1
次のステップに進む 2

第 2 章 Launchpad の始動 3
始動前の準備 3
Launchpad の起動 4
次のステップに進む 5

第 3 章 必要なソフトウェア前提条件と WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール 7
インストールするコンポーネントの決定 (「カスタム」インストールのみ) 8
「標準」インストール 11
「カスタム」インストール 17
ソフトウェア前提条件 22
First Steps の使用 26
WebSphere MQ サービスへのリスナーの追加 29
ディレクトリー構造およびファイル 30
初期インストール後の追加コンポーネントのインストール 32
GUI を使用した WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール 33
次のステップに進む 34

第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの始動および管理 35
WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動 35
InterChange Server Express のセットアップ 35
次のステップに進む 37

第 5 章 インストールの検証 39
Quick Validate 39
次のステップに進む 39

第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール 41
GUI による Adapter Capacity Pack のインストール 41
GUI による Adapter Capacity Pack のアンインストール 44
次のステップに進む 44

第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール 45
GUI による Collaboration Capacity Pack のインストール 45

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

GUI による Collaboration Capacity Pack のアンインストール 48
次のステップに進む 49

第 8 章 Web ベース・ツールの手動構成. 51
Web ベース・ツールについて 52
WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を使用するための Web ベース・ツールの構成 53
Tomcat を使用するための Web ベース・ツールの構成 56
Tomcat を使用するための Web Deployment の構成 57
Collaboration Enablement for Portal の構成 58
次のステップに進む 59

第 9 章 システムのアップグレード 61
サポートされるアップグレード・シナリオと前提事項 61
既存のシステムの準備 62
WebSphere Business Integration Server Express V4.4 から Express Plus V4.4 へのアップグレード 68
WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 から Express V4.4 へのアップグレード 72
WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から Express Plus V4.4 へのアップグレード. 76
新規のアップグレード・バージョンの始動 85
アップグレードの検証 85
アップグレード・バージョンのテスト 86
アップグレード・バージョンのバックアップ 86
次のステップに進む 86

付録. サイレント・インストールおよびアンインストール 87
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール 87
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・アンインストール 88
Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール 88
Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール 89
Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール 89
Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストール. 89

特記事項 91
プログラミング・インターフェース情報 92
商標 93

索引 95

本書について

IBM(R) WebSphere(R) Business Integration Server Express 製品および IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品は、InterChange Server Express、関連する Toolset Express、CollaborationFoundation、およびソフトウェア統合アダプターのセットで構成されています。Toolset Express に含まれるツールは、ビジネス・オブジェクトの作成、変更、および管理に役立ちます。プリパッケージされている各種アダプターは、お客様の複数アプリケーションにまたがるビジネス・プロセスに応じて、いずれかを選べるようになっています。標準的な処理のテンプレートである CollaborationFoundation は、カスタマイズされたプロセスを簡単に作成できるようにするためのものです。

本書では、IBM WebSphere Business Integration Server Express システムおよび IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus システムのインストール方法とセットアップ方法について説明します。

特に明記されていない限り、本書の情報は、いずれも、IBM WebSphere Business Integration Server Express と IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus の両方に当てはまります。WebSphere Business Integration Server Express という用語と、これを言い換えた用語は、これらの 2 つの製品の両方を指します。

対象読者

本書は、Microsoft(R) Windows(R) 環境で WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール、配置、および管理を担当するコンサルタントやシステム管理者を対象としています。

関連資料

本書の対象製品の一連の関連文書には、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のどのインストールにも共通する機能とコンポーネントの解説のほか、特定のコンポーネントに関する参考資料が含まれています。

関連文書は、`http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter` でダウンロード、インストール、および表示することができます。

注: 本書の発行後に公開されたテクニカル・サポートの技術情報や速報に、本書の対象製品に関する重要な情報が記載されている場合があります。これらの技術情報や速報は、WebSphere Business Integration のサポート Web サイト (`http://www.ibm.com/software/integration/websphere/support`) で参照できます。適切なコンポーネント領域を選択し、「Technotes (技術情報)」セクションと「Flashes (速報)」セクションを参照してください。

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

表記上の規則

本書は、次の規則に従って編集されています。

`Courier フォント`	コマンド名、ファイル名、入力情報、システムが画面に出力した情報など、リテラル値を示します。
太字	初出語を示します。
イタリック	変数名または相互参照を示します。PDF ファイルを表示した場合、相互参照は青色のイタリック体で表示されます。相互参照を選択すると、目的の情報にジャンプできます。
イタリック courier	リテラル・テキストの中の変数名を示します。
囲み線付き Courier	コード・フラグメントをその他の本文と区別します。
青のアウトライン	オンラインで表示したときにのみ見られる青のアウトラインは、相互参照用のハイパーリンクです。アウトラインの内側を選択すると、参照先オブジェクトにジャンプします。
{ }	構文の記述行の場合、中括弧 { } で囲まれた部分は、選択対象のオプションです。1 つのオプションのみを選択する必要があります。
[ ]	構文の記述行の場合、大括弧 [ ] で囲まれた部分は、オプションのパラメーターです。
...	構文の記述行の場合、省略符号 ... は直前のパラメーターが繰り返されることを示します。例えば、`option[,...]` は、複数のオプションをコンマで区切って指定できることを意味します。
¥	本書では、ディレクトリー・パスの規則として円記号 (¥) を使用します。UNIX(R) システムの場合には、円記号 (¥) をスラッシュ (/) に置き換えてください。すべての IBM WebSphere Business Integration Server Express のパス名は、ご使用のシステムにおいてこの製品がインストールされているディレクトリーを基準とした相対パスです。
ProductDir	製品のインストール先ディレクトリーを表します。

本リリースの新機能

リリース 4.4 の新機能

このリリースでは、インストールにおいて以下の変更が加えられており、これらが本書に反映されています。

- 「カスタム」および「標準」のインストール・オプション
- First Steps アプリケーションのインストール
- 「Quick Start」は「Quick Validate」と呼ばれるようになり、First Steps からの組み込みオンライン文書でサポートされるようになりました。
- Web Deployment アプリケーションのインストール
- 役割ベースのアクセス制御、およびユーザーが定義可能なユーザー名およびパスワード

リリース 4.3.1 の新機能

このリリースでは、以下のオペレーティング・システムに対する実動モードのサポートを追加しています。

- IBM OS/400 V5R2、V5R3
- Red Hat Enterprise Linux(TM) AS 3.0 (Update 1 を適用)
- SuSE Linux Enterprise Server 8.1 SP3
- Microsoft Windows 2003

リリース 4.3 の新機能

本書の最初のリリースです。

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

第 1 章 インストールの概要

IBM WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus 製品には、Launchpad と呼ばれるグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) ベースのセットアップ・プログラムが組み込まれています。Launchpad は、前提条件ソフトウェアと製品ソフトウェアのインストールおよび構成の方法をステップバイステップに示します。

Launchpad を使用すると、デフォルトのコンポーネント一式を自動的にインストールする「標準」インストールか、またはインストールするコンポーネントを選択できる「カスタム」インストールを実行できます。いずれの場合も、Launchpad は、システムにその他の必要な前提条件ソフトウェアがすでにインストールされているかどうかを検出し、この情報を表示します。前提条件ソフトウェアがインストールされると、Launchpad は、インストールが完了するまで引き続き手順を示します。

本書では、IBM WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を動作させるために必要な、インストールや初期構成のプロセスの各手順について詳細に説明します。主な手順は次のとおりです。

1. この製品をインストールする予定のシステムが、ハードウェア要件およびソフトウェア要件を満たしていることを確認します。固有の要件については、`http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress` を参照してください。
2. Launchpad を始動し、そこから製品のインストールを開始します。(第 2 章)
3. 「標準」インストールと「カスタム」インストールのどちらにするかを決定します。標準インストールとカスタム・インストールの違いについては、第 3 章を参照してください。Launchpad により、サポートされている前提条件ソフトウェアが検査されます。サポートされている前提条件ソフトウェアのリストについては、`http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress` を参照してください。次に、残りの Launchpad インストール・プロセスに進みます。(第 3 章)
4. 必要な追加構成手順がある場合は、それを実行します。(第 3 章)
5. システムを始動し、First Steps または Windows の「スタート」メニューを介して初期管理を行います。(第 4 章)
6. (オプションですが実行を推奨します。) First Steps 内にある「Quick Validate」プロシージャーを使用して、システムがインストールされ、正しく動作していることを確認します。(第 5 章)
7. (WebSphere Business Integration Server Express Plus の場合のみのオプション) Adapter Capacity Pack からアプリケーション・アダプターをインストールします。(第 6 章)
8. (WebSphere Business Integration Server Express Plus の場合のみのオプション) Collaboration Capacity Pack からコラボレーションをインストールします。(第 7 章)

本書のその他の章では、以下について説明します。

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

- 51 ページの『第 8 章 Web ベース・ツールの手動構成』
- 61 ページの『第 9 章 システムのアップグレード』
- 87 ページの『サイレント・インストールおよびアンインストール』

次のステップに進む

インストールおよび構成のプロセスを開始するには、 3 ページの『第 2 章 Launchpad の始動』に進んで、Launchpad の基本機能を学習します。

第 2 章 Launchpad の始動

Launchpad GUI を使用して WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールおよび構成を順を追って行うには、基本的な機能を習得する必要があります。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『始動前の準備』
- 4 ページの『Launchpad の起動』
- 5 ページの『次のステップに進む』

始動前の準備

Launchpad を始動する前に、以下の作業を行います。

- 使用しているシステムが、Web ページ `http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress` に記載されているハードウェア要件に合致していることを確認します。

  注: このサーバー・マシンで使用できる物理的なプロセッサーの最大数は、2 つに制限されます。詳細については、製品のライセンス条件を参照してください。

- 製品に有効なフィックスパックがあるかどうかを、次のサイトで確認します。`http://www.ibm.com/software/integration/websphere/support/`
- すべての Windows アプリケーションがシャットダウンしていることを確認します。
- Windows 管理者特権を持っていることを確認します。この要件に適合していないと、問題の概要を示したエラー・メッセージが表示され、Launchpad プログラムが終了します。
- 本書におけるインストールの指示は、製品 CD からのインストールを想定しています。パスポート・アドバンテージから入手した ESD からインストールしている場合は、以下の手順を実行します。
  - ダウンロード手順については、使用するパスポート・アドバンテージの情報を参照してください。
  - すべての ESD をハードディスク・ドライブ上の同じディレクトリーに解凍し、このハードディスク・ドライブからインストールして、正常なインストーラー機能を確保できるようにします。ESD イメージを基にして CD を作成して、その CD からインストールするようなことはしないでください。そのようにした場合、一部のソフトウェア前提条件の構成ユーティリティーは、実際の前提条件ソフトウェアが含まれている ESD にパッケージされないため、インストールに失敗する可能性があります。
  - ESD の解凍先ディレクトリーのコンポーネント・フォルダーの名前にスペースがないことを確認します。例えば、C:¥Program Files¥WBISE は、フォルダーの

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

名前 Program Files にスペースが入っているため、無効なディレクトリーです。C:¥WBISE は、フォルダー名 WBISE にスペースが入っていないため、有効なディレクトリーです。

- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストーラーによって、System Monitor、Failed Event Manager、Web Deployment のいずれかを自動的に構成し、Express 製品または Express Plus 製品、および WebSphere Application Server Express または WebSphere Application Server で使用できるようにする場合は、先に サポートされているバージョンの WebSphere Application Server Express または WebSphere Application Server をインストールしてから、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストーラーを実行する必要があります。そうしないと、 51 ページの『第 8 章 Web ベース・ツールの手動構成』で説明するように、System Monitor、Failed Event Manager、または Web Deployment を手動で構成することが必要になります。

  サポートされるバージョンの WebSphere Application Server Express または WebSphere Application Server については、`http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress` を参照してください。 64 ページの『前提条件ソフトウェアのアップグレード』も参照してください。
- 新規データベースの作成および新規ユーザーの追加を行うための管理者特権があることを確認します。

Launchpad の起動

Launchpad を起動するには、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の基本コンポーネントが収録された CD をコンピューターに挿入します。Launchpad の「ようこそ」画面が表示されます。「ようこそ」画面の左側のボタンを使用すれば、いくつかのタスクを即時に選択できます。

WebSphere Business Integration Server Express 製品の Launchpad の「ようこそ」画面は、WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品とは少し異なります。

図 1 は、WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品の Launchpad の「ようこそ」画面の例です。Express Plus バージョンには、「**Capacity Pack のインストール**」というボタンがある点に注目してください (Express バージョンにはありません)。このボタンにより、Adapter Capacity Pack と Collaboration Capacity Pack のインストーラーを起動できます。Adapter Capacity Pack と Collaboration Capacity Pack のインストール手順については、 41 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』および 45 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』の説明を参照してください。

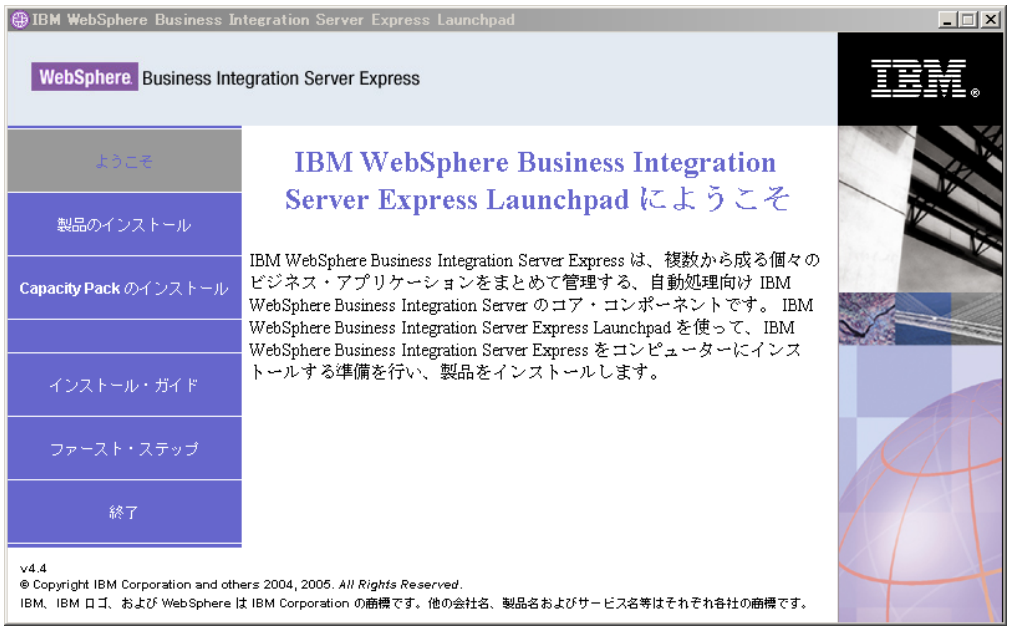

図 1. WebSphere Business Integration Server Express Plus Launchpad の「ようこそ」画面

「ようこそ」画面のボタンによって制御されるタスクは、次のとおりです。

製品のインストール
: インストールする製品コンポーネントに基づいて、適切なソフトウェア前提条件をインストールするようユーザーをガイドし、さらに製品コンポーネントもインストールします。

Capacity Pack のインストール
: (WebSphere Business Integration Express Plus のみ。) 基本製品では入手できないコラボレーションや追加アダプターのインストールを可能にします。

インストール・ガイド
: WebSphere Business Integration Server Express Information Center に導く Web ページにリンクします。Information Center では、このインストール・ガイドを含むすべての製品資料を入手できます。

ファースト・ステップ
: First Steps アプリケーションを起動します。First Steps アプリケーションは、単一のインターフェースで、インストールの完了後は、これを使用して WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を使用および管理します。

終了
: Launchpad を終了します。

次のステップに進む

この章で概説されている Launchpad GUI の基本操作の実行に問題がない場合は、7 ページの『第 3 章 必要なソフトウェア前提条件と WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール』に進み、必要な前提条件ソフトウェアの確認、選択された前提条件ソフトウェアのインストール、および WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールを実行するために Launchpad を使用する方法についての説明を参照してください。

第 3 章 必要なソフトウェア前提条件と WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムは、インストールする予定のコンポーネントに基づいて、インストールに必要な前提条件ソフトウェアを決定します。特定の項目がインストールされていない場合は、それらの項目をインストールできます。

Launchpad には、「標準」と「カスタム」の 2 種類のインストール・オプションが用意されています。

「標準」インストールでは、以下のコンポーネントが自動的にインストールされます。

- InterChange Server Express
- Toolset Express
- JText Adapter
- サンプル

「標準」インストールでは、必要な前提条件コンポーネントがあることとその大半をインストールできるかどうかも自動的に検出されます。

「カスタム」インストールでは、インストールするコンポーネントを選択できます。「標準」インストールの場合と同様に、前提条件のコンポーネントがインストールされていることとそれらをインストールできるかどうかも検出されます。選択可能なコンポーネントの詳細は、 8 ページの『インストールするコンポーネントの決定 (「カスタム」インストールのみ)』のセクションを参照してください。「カスタム」インストールの詳細は、 17 ページの『「カスタム」インストール』のセクションを参照してください。

「標準」インストール・オプションの詳細は、 11 ページの『「標準」インストール』のセクションを参照してください。

インストールの説明では、この章全体を通して以下の事項を前提にしています。

- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus バージョン 4.4 は、まだマシンにインストールされていない。以前のバージョンの製品または Capacity Pack がインストールされていて、これらをバージョン 4.4 にアップグレードする場合や、WebSphere Business Integration Server Express V4.4 がインストールされていて、これを WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.4 にアップグレードする場合は、手順について 61 ページの『第 9 章 システムのアップグレード』を参照してください。
- コンポーネントのインストール先マシンは、Windows 2003 オペレーティング・システムが稼働している実稼働環境のマシンである。*インストーラーが Windows XP システム上で実行される場合、表示されない画面があったり、異なる選択肢が表示される画面があったりします。*実稼働環境と開発環境の両方の Windows

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

プラットフォームでサポートされている製品コンポーネントの一覧については、http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress を参照してください。

- インストールは、WebSphere Business Integration Server Express Plus システムに関するものです。WebSphere Business Integration Server Express システムをインストールする場合は、表示される画面が少し異なります。
- 読者は、 3 ページの『第 2 章 Launchpad の始動』の情報を読んで理解し、Launchpad を起動済みであるとします。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『インストールするコンポーネントの決定 (「カスタム」インストールのみ)』
- 11 ページの『「標準」インストール』
- 17 ページの『「カスタム」インストール』
- 22 ページの『ソフトウェア前提条件』
- 26 ページの『First Steps の使用』
- 29 ページの『WebSphere MQ サービスへのリスナーの追加』
- 30 ページの『ディレクトリー構造およびファイル』
- 32 ページの『初期インストール後の追加コンポーネントのインストール』
- 33 ページの『GUI を使用した WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール』
- 34 ページの『次のステップに進む』

サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールの実行手順については、 87 ページの『サイレント・インストールおよびアンインストール』を参照してください。

インストールするコンポーネントの決定 (「カスタム」インストールのみ)

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus を「カスタム」インストールを使用してインストールするときは、製品コンポーネントの全部または一部のサブセットをインストールできます。インストール可能なコンポーネントは、Launchpad の「セットアップ・タイプを選択してください」画面の「**カスタム**」ボタンを選択するときに表示される画面、またはサイレント・インストール時に使用される応答ファイル内のいずれかから選択できます。

注: 前述したように、「標準」インストールでは、インストール対象のコンポーネントが Launchpad によって自動的に検出されます。

インストールに使用可能なコンポーネントは、使用する Windows プラットフォームによって異なります。インストールされたコンポーネントに対するサポートは、それらのコンポーネントが実稼働環境で使用されるか、開発環境で使用されるかによって異なります。実稼働環境と開発環境の両方の Windows プラットフォームでサポートされている製品コンポーネントの一覧については、`http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress` を参照してください。

以下のセクションでは、インストール可能なコンポーネントを、サポートされている Windows オペレーティング・システムごとに説明しています。

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus が実稼働環境または開発環境で稼働するのは、Windows 2003 プラットフォームに限られます。Windows XP プラットフォームでサポートされるのは、開発環境の製品だけです。アダプターがサポートされるのも Windows 2003 プラットフォームのみです。

InterChange Server Express および Toolset Express コンポーネントの詳細については「*システム管理ガイド*」、アダプターの詳細については個々のアダプター・ガイドを参照してください。すべての文書は、Web サイト `http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter` で参照できます。

Windows 2003 システムでのインストールに使用できるコンポーネント

Windows 2003 システムへのインストール時に、以下のコンポーネントのセットから選択できます。

- InterChange Server Express
- Toolset Express。以下のサブコンポーネントが含まれます。
  - 管理ツール - さまざまなシステム環境を管理およびモニターします。
  - 開発ツール - 新規または既存のシステム・コンポーネントを構成、カスタマイズ、または作成します。

  管理ツールをインストールすることにより、以下のコンポーネントが得られます。
  - Flow Manager
  - Log Viewer
  - Relationship Manager
  - System Manager
  - System Monitor
  - Failed Event Manager
  - Web Deployment

  開発ツールをインストールすることにより、以下のコンポーネントが得られます。
  - Business Object Designer Express
  - Connector Configurator Express
  - 統合テスト環境
  - Map Designer Express
  - Process Designer Express (WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境でのみ使用可能)
  - Relationship Designer Express
  - WebSphere Studio WorkBench 3.0.1 (WSWB301)

    注: インストーラーは、この製品をディレクトリー *ProductDir*`¥Tools¥ies301` にインストールします。必要な System Manager プラグインは、すべてディレクトリー *ProductDir*`¥Tools¥eclipse¥plugins` にインストールされます。

- Test Connector

- 次のリストから選択したアダプター。
  - Adapter for COM
  - Adapter for e-Mail
  - Adapter for Exchange
  - Adapter for iSeries
  - Adapter for JDBC
  - Adapter for JMS
  - Adapter for JText
  - Adapter for Lotus Domino
  - Adapter for Healthcare Data Protocols
  - Adapter for HTTP
  - Adapter for SWIFT
  - Adapter for TCP/IP
  - Adapter for Web Services
  - Adapter for WebSphere Commerce
  - Adapter for WebSphere MQ
  - Adapter for XML

  注: 一部のアダプターには対応する Object Discovery Agents (ODA) があり、それらのアダプターが選択されると、その ODA がインストールされます。いずれのアダプターを選択した場合も、次のコンポーネントがインストールされます。
  - Data Handler for Complex Data
  - Data Handler for EDI
  - Data Handler for XML

- サンプル・コンポーネントは、System Test と呼ばれる構成済みのサンプルをインストールします。この System Test を実行すれば、インストールが正しく行われ、正常に動作するかを検証できます。

Windows XP システムでのインストールに使用できるコンポーネント

Windows XP システムでのインストール時には、以下のコンポーネントから選択できます。

- InterChange Server Express (実稼働環境では未サポート)。
- Toolset Express。以下のサブコンポーネントが含まれます。
  - 管理ツール - さまざまなシステム環境を管理およびモニターします。
  - 開発ツール - 新規または既存のシステム・コンポーネントを構成、カスタマイズ、または作成します。

  管理ツールをインストールすることにより、以下のコンポーネントが得られます。

- Flow Manager
- Log Viewer
- Relationship Manager
- System Manager
- System Monitor
- Failed Event Manager
- Web Deployment

開発ツールをインストールすることにより、以下のコンポーネントが得られます。

- Business Object Designer Express
- Connector Configurator Express
- 統合テスト環境
- Map Designer Express
- Process Designer Express (WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境でのみ使用可能)
- Relationship Designer Express
- WebSphere Studio WorkBench 3.0.1 (WSWB301)

  注: インストーラーは、この製品をディレクトリー *ProductDir*¥Tools¥ies301 にインストールします。必要な System Manager プラグインは、すべてディレクトリー *ProductDir*¥Tools¥eclipse¥plugins にインストールされます。
- Test Connector

• サンプル・コンポーネントは、System Test と呼ばれる構成済みのサンプルをインストールします。この System Test を実行すれば、インストールが正しく行われ、正常に動作するかを検証できます。詳しくは、39 ページの『第 5 章 インストールの検証』を参照してください。

「標準」インストール

「標準」インストールを開始するには、以下の手順に従います。

1. 「ようこそ」画面で、「**製品のインストール**」を選択します。

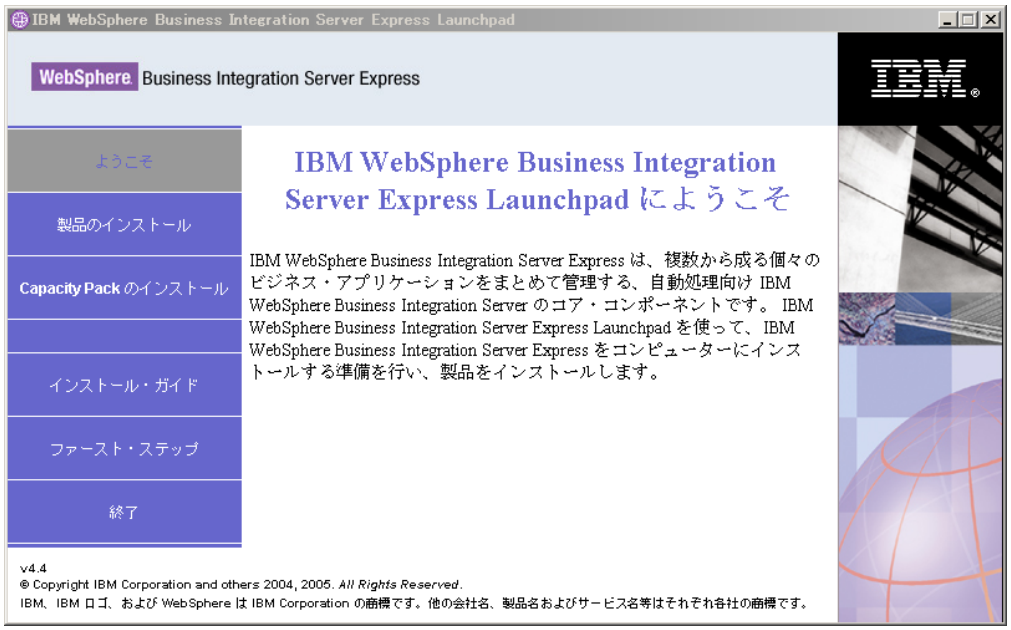

図 2. 「ようこそ」画面

「セットアップ・タイプを選択してください」画面が表示されます。

2. 「セットアップ・タイプを選択してください」画面で、「**標準**」を選択します。

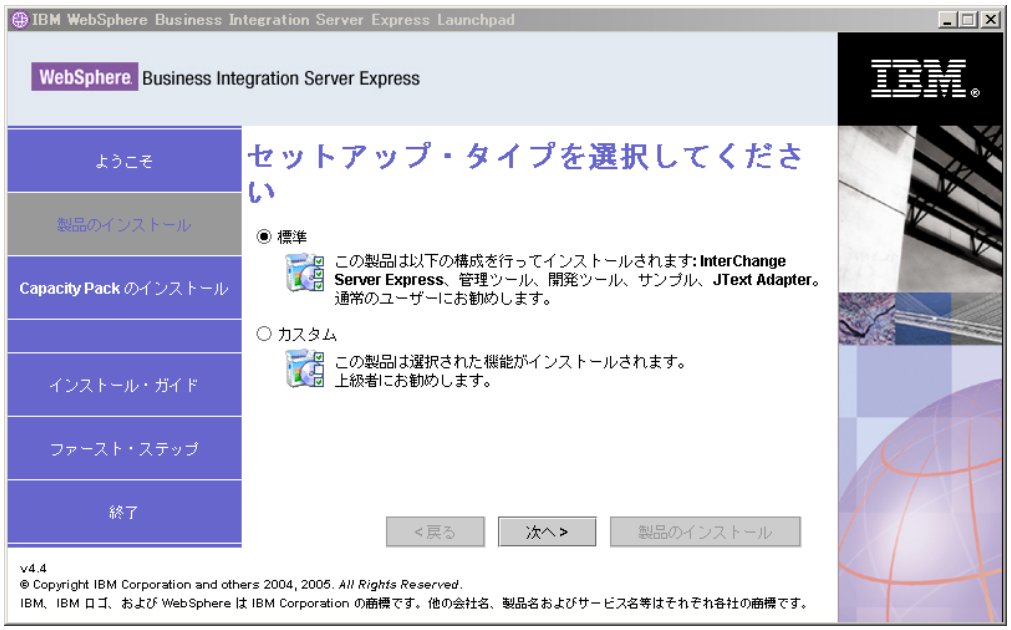

図 3. 「セットアップ・タイプを選択してください」画面

「標準」インストールを選択すると、「ソフトウェア前提条件」画面が表示されます。

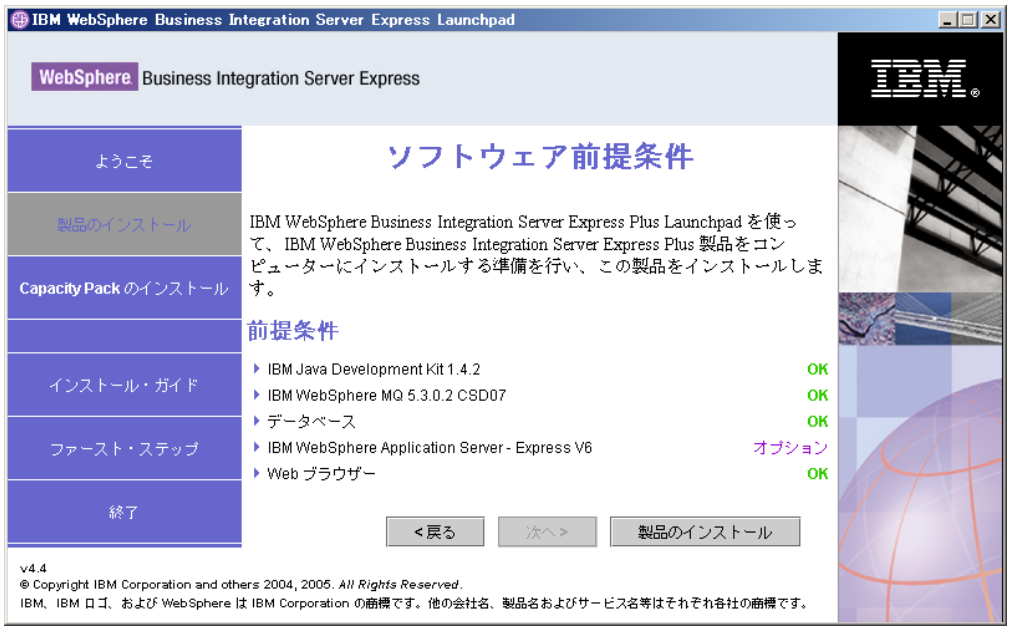

図 4. 選択された前提条件をインストールする前の「ソフトウェア前提条件」画面

3. Launchpad には、各前提条件のインストール状況が表示されます。状況値としては、「**未インストール**」、「**オプション**」、または「**OK**」があります。また、データベース選択に関してのみ、「**未構成**」があります。

   システムに必要なソフトウェア・プログラムの状況が「**未インストール**」または「**オプション**」である場合は、Launchpad を使用して、対象のソフトウェアをインストールするか、または入手先を通知するようにできます。

   Launchpad を使用してソフトウェア・プログラムをインストールするには、製品名をクリックします。「**インストール**」ボタンが表示されます。「**インストール**」ボタンを選択して、プログラムのインストールを開始します。ソフトウェア・プログラムのインストール・プロセスが完了すると、「ソフトウェア前提条件」画面に戻り、プログラム名の横に「**OK**」が表示されます。

   データベースがインストール済みで、その状況が「**未構成**」の場合は、Launchpad を使用してデータベースを構成できます。データベース名をクリックして、構成を開始します。

   注: このシステムに前提条件ソフトウェアの旧バージョンがすでにインストールされている場合、Launchpad の動作の詳細と、バージョンに応じた必要な処理の詳細については、61 ページの『第 9 章 システムのアップグレード』を参照してください。

   特定の前提条件ソフトウェアをインストールする必要がある理由など、前提条件ソフトウェアのインストールの詳細は、22 ページの『ソフトウェア前提条件』のセクションを参照してください。

   予定しているインストールに必要な前提条件ソフトウェアの状況が「**OK**」になったら、画面の下部にある「**製品のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

「ソフトウェア・ライセンス情報」画面が表示されます。

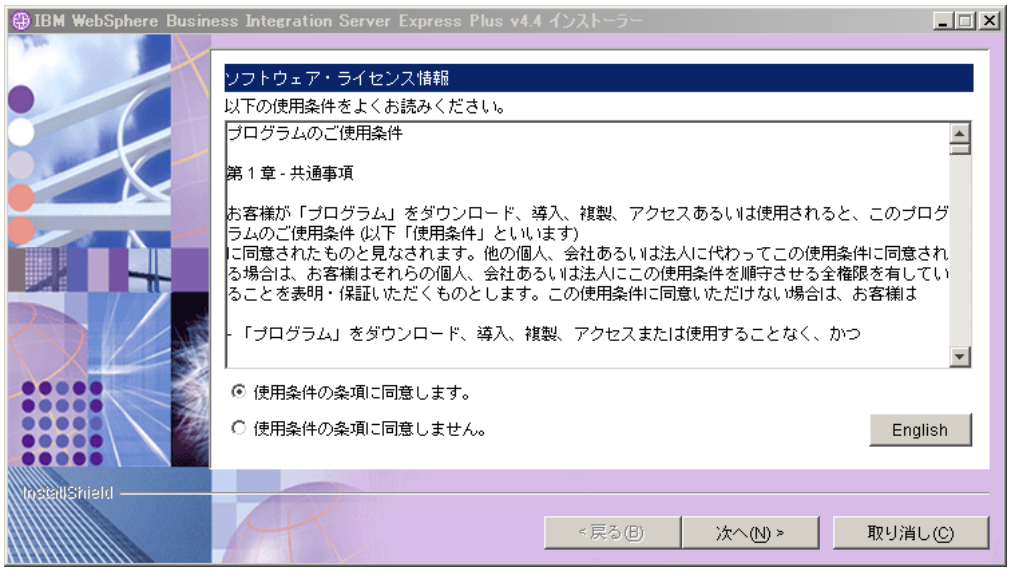

図 5. 「ソフトウェア・ライセンス情報」画面

4. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**使用条件の条項に同意します**」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「**次へ**」を選択します。

   「宛先」画面が表示されます。

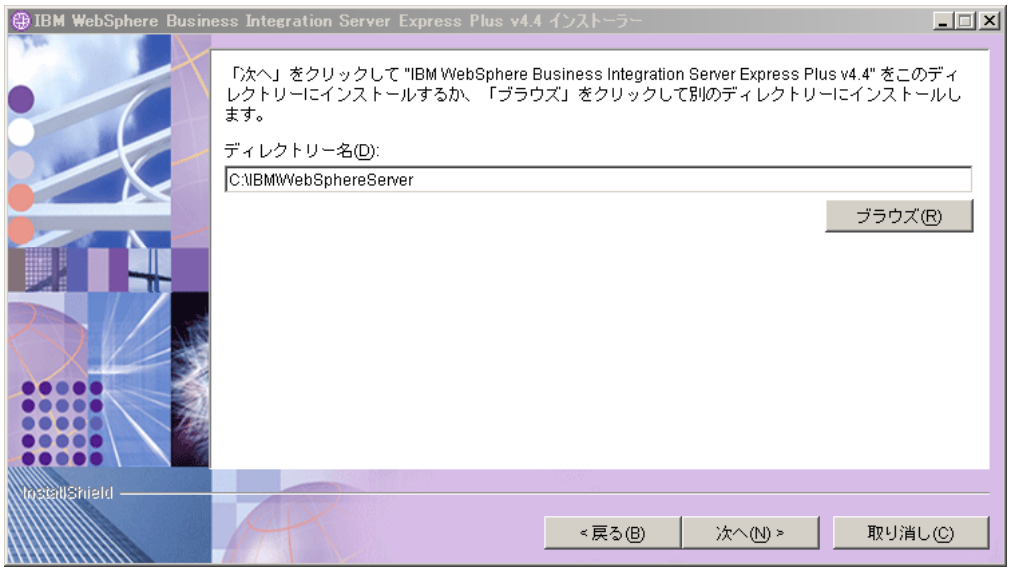

図 6. 「宛先」画面

5. 「宛先」画面で、デフォルトのインストール先 `C:¥IBM¥WebSphereServer` をそのまま使用するか、別のロケーションを参照して「**次へ**」を選択します。

注: ディレクトリー・パスの中にスペースが入らないようにしてください。本書では、インストール・ディレクトリー `C:¥IBM¥WebSphereServer` (または、入力した代替パス) のことを *`ProductDir`* と呼びます。

次のいずれかの処理が実行されます。

- 前提条件が満たされていない場合は、エラー・メッセージが表示され、インストールは強制的に取り消されます。
- 前提条件が満たされると、「RBAC」画面が表示されます。

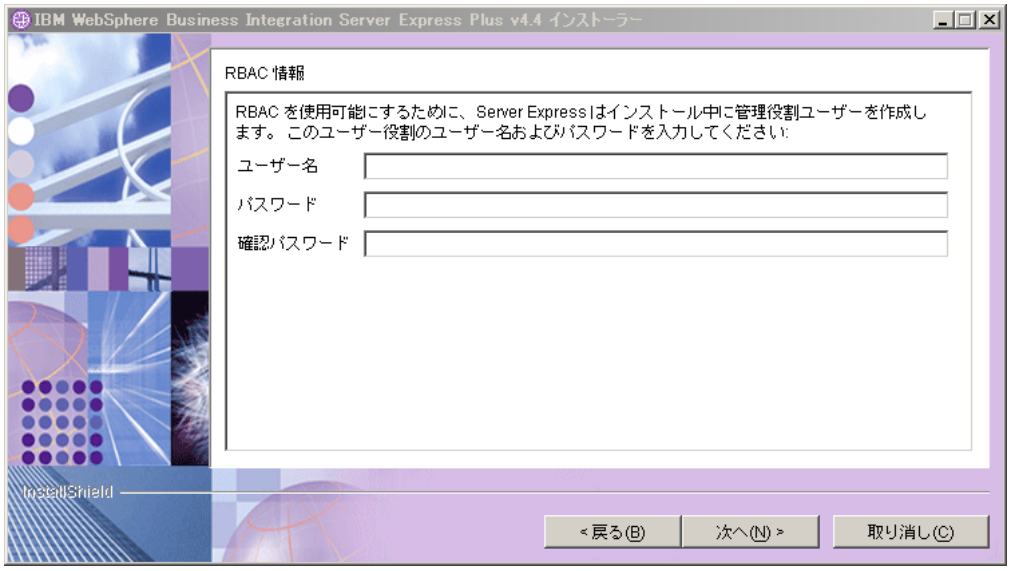

図 7. 「RBAC」画面

6. Role-Based Access Control (RBAC) を使用可能にするには、「ユーザー名」と「パスワード」を入力して、「**次へ**」を選択します。

   入力したユーザー名とパスワードのメモを取っておいてください。後で必要になります。

   注: RBAC には、サーバー・アクセスのセキュリティーを向上する機能があります。入力したユーザー名とパスワードは、サーバーへの配置時にサーバー管理者の役割を作成するときに使用します。この情報は `InterChangeSystem.cfg` ファイルに格納されます。その際、パスワードは暗号化されます。RBAC に関する役割の追加やパスワードの変更がある場合は、後で System Manager を使用して実行する必要があります。

   「要約」画面が表示されます。

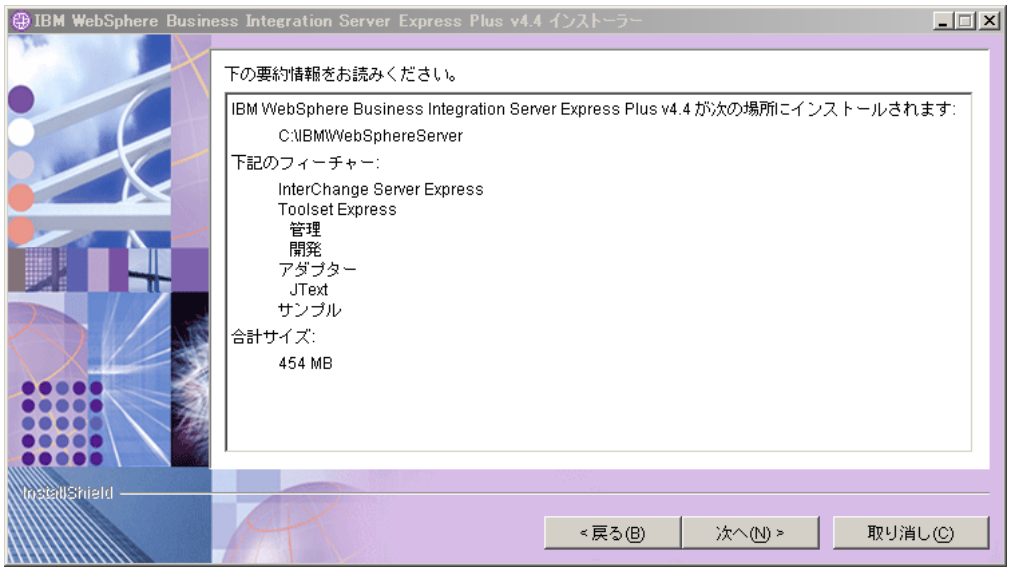

図 8. 「要約」画面

7. 「要約」画面には、選択したインストールの選択肢の要約が表示されます。内容を読んで正しいことを確認し、「**次へ**」を選択します。インストール・プロセスが開始されます。
8. インストール・プロセスが開始すると、インストーラーは、インストール用に十分なディスク・スペースがあるかどうかを検査します。
   - 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「**戻る**」ボタンと「**キャンセル**」ボタンのみが使用可能になっているパネルが表示されます。この場合は、指定のドライブにある程度の空きスペースを作成するか、または「宛先」画面に戻ってまったく別の場所に宛先を変更する必要があります。
   - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。多数の通知画面が表示されます。インストールと構成が完了すると、処理が正常に終了したか、または問題が発生したかを示す画面が表示されます。「**完了**」を選択して、インストール GUI を終了します。

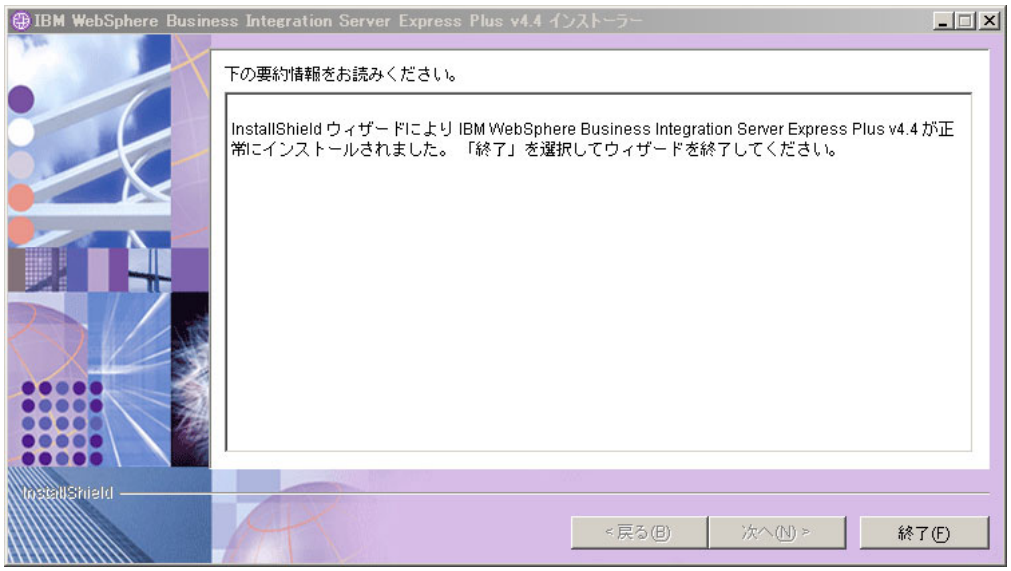

図 9. 「ポストインストールの要約 (Post-installation Summary)」画面

インストールが完了したことを通知するウィンドウが表示され、First Steps アプリケーションを起動するかどうかを尋ねられます。このアプリケーションの詳細については、 26 ページの『First Steps の使用』のセクションを参照してください。

9. 29 ページの『WebSphere MQ サービスへのリスナーの追加』のセクションにある指示に従って、WebSphere MQ サービスにリスナーを追加します。

インストール・プロセスでは、以下の処理が完了しました。

- 製品コンポーネントがインストールされました。
- Toolset Express が使用する `Cwtools.cfg` ファイルが構成されました。
- InterChange Server Express が使用する `InterchangeSystem.cfg` ファイルが構成されました。
- WebSphere MQ のキュー・マネージャーが構成されました。
- InterChange Server Express およびアダプターがサービスとして構成されました。
- プラットフォーム固有の構成および登録が提供されました。
- コンテンツが InterChange Server Express に配置されました。

インストールされたコンポーネントと実行されたその他の処理を詳細に示すログ・ファイルがインストール処理中に作成されます。このファイルは、`wbi_server_exp_install_log.txt` に置かれます。この時点で、 30 ページの『ディレクトリー構造およびファイル』に示すシステムのファイルおよびディレクトリー構造を見ることができます。

「カスタム」インストール

このセクションでは、「カスタム」インストールに特有の 4 つのコンポーネント選択画面について説明します。これらの画面での操作が済んだら、ステップ 3 (13 ページ) を参照して、インストール・プロセスを完了してください。チェック・ボックスの説明を見るには、このアイコンをクリックしてください。

注: チェック・ボックスの横にヘルプ・アイコン があるものもあります。チェック・ボックスの説明を見るには、このアイコンをクリックしてください。

インストール対象コンポーネントの選択

どのコンポーネントをインストールするかをシステムに伝えるには、以下のステップを実行します。

1. 「**カスタム**」ラジオ・ボタンを選択します。「サーバーのインストール」画面が表示されます。

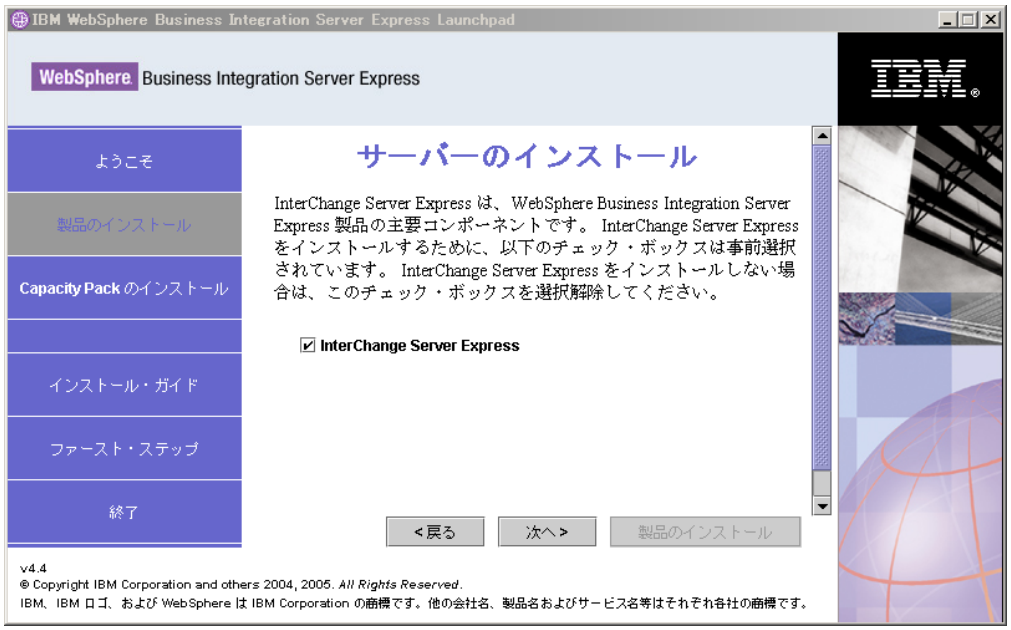

図 10. 「サーバーのインストール」画面

2. 「サーバーのインストール」画面で、エントリー「**InterChange Server Express**」の横のチェック・ボックスがデフォルトで選択されています。以下のいずれかを実行します。
   - InterChange Server Express をインストールする場合は、「**次へ**」を選択します。
   - InterChange Server Express をインストールしない 場合は、チェック・ボックスを選択解除して、「**次へ**」を選択します。

   「ツールのインストール」画面が表示されます。

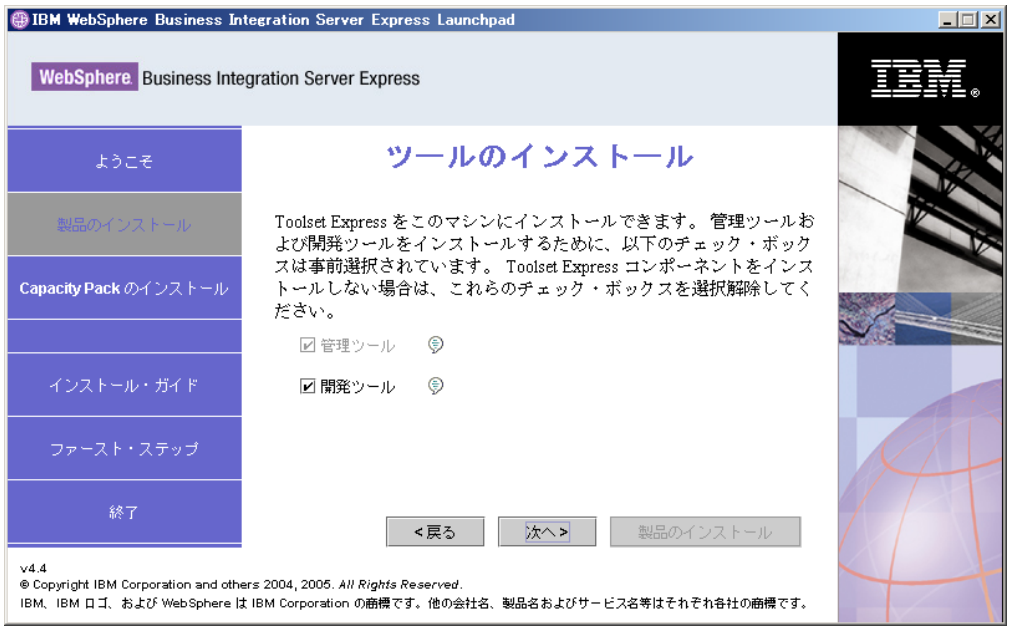

図 11. 「ツールのインストール」画面

3. 「ツールのインストール」画面で、「**管理ツール**」項目と「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスは、デフォルトで選択されています。以下のいずれかを実行します。
   - 管理ツールと開発ツールの*両方* をインストールするには、「**次へ**」を選択します。
   - 管理ツールのみをインストールするには、「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスを選択解除し、「**次へ**」を選択します。

     注: 開発ツールのみをインストールすることはできません。開発ツールをインストールするには、管理ツールもインストールする必要があります。
   - 管理ツールと開発ツールをどちらもインストールしない 場合は、「**管理ツール**」項目と「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスを選択解除し、「**次へ**」を選択します。

     ヒント: 最初に、「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスを選択解除します。これにより、「**管理ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスが使用可能になり、チェック・ボックスを選択解除できるようになります。

   「アダプターのインストール」画面が表示されます。

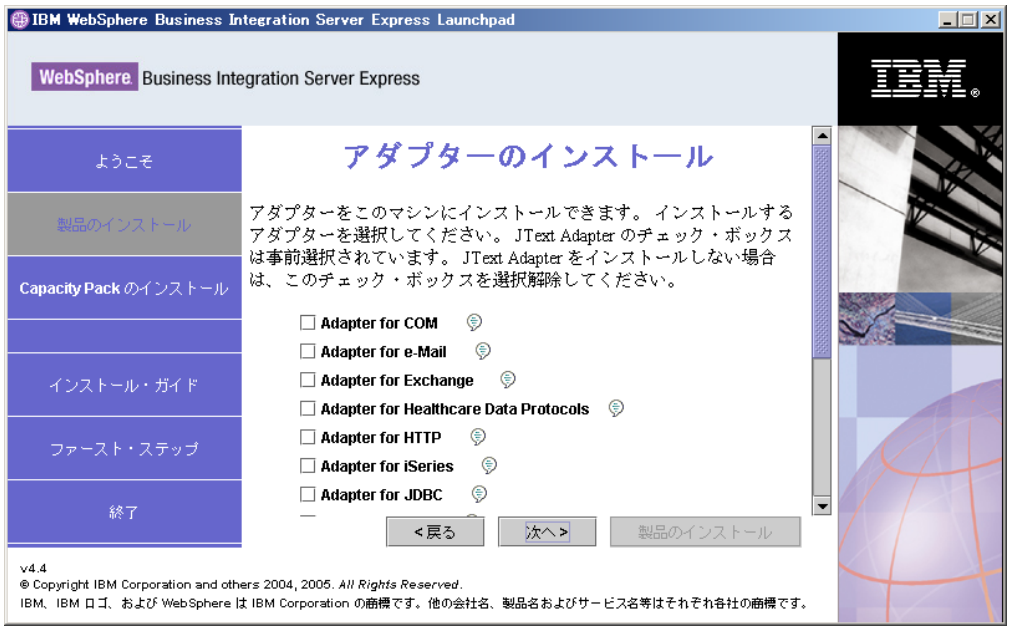

図 12. 「アダプターのインストール」画面

4. 「アダプターのインストール」画面で、インストールするアダプターを選択します。「**次へ**」を選択します。

   「サンプルのインストール」画面が表示されます。

   注: Adapter for JText はデフォルトで選択されていますが、これは、Adapter for JText が、サンプル・コンポーネントの一部である System Test サンプルの実行に必要になることと、Quick Validate プロセスを完了してインストールを検査するために必要になることが理由です。Quick Validate の詳細については、39 ページの『第 5 章 インストールの検証』 を参照してください。

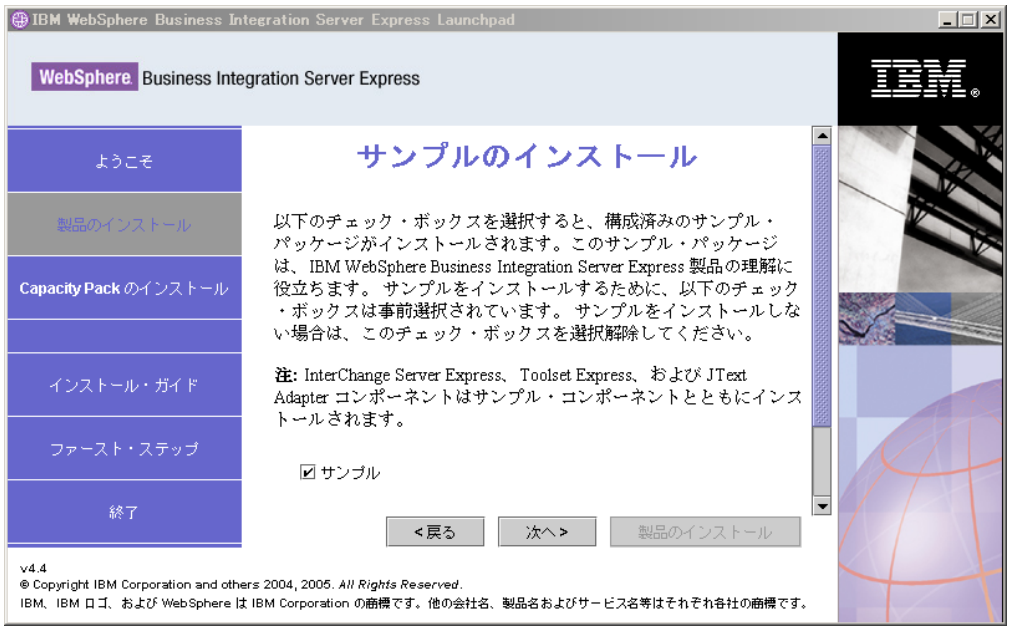

図 13. 「サンプルのインストール」画面

5. 「サンプルのインストール」画面で、「**サンプル**」項目の横にあるチェック・ボックスがデフォルトで事前選択されています。これらのサンプルは、システムのインストール状態を検査するために使用できる Quick Validate プロセスに必要です。
   - サンプル・コンポーネントをインストールする場合は、「**次へ**」を選択します。

     注: サンプル・コンポーネントをインストールするには、InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter のインストールが必要です。そのため、サンプル・コンポーネントのインストールを選択すると、InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter は、ユーザーが前の画面でこれらのインストールを選択したかどうかにかかわらず、インストールされます。
   - サンプル・コンポーネントをインストールしない 場合は、チェック・ボックスを選択解除して、「**次へ**」を選択します。

   「ソフトウェア前提条件」画面が表示されます。

「ソフトウェア前提条件」画面の詳細については、ステップ 3 (13 ページ) を参照してください。残りのインストール・プロセスについては、そのセクションの説明に従ってください。

注: リモートの IBM DB2 Universal Database を使用する予定の場合は、 24 ページの『IBM DB2 Universal Database V8.2 Express』を参照してください。

「カスタム」インストールの追加情報

「カスタム」インストール・プロセス中、「宛先」画面からインストール先を選択すると、該当する前提条件ソフトウェアが存在し、それが適切に構成されているかどうかがインストーラーによって検査されます。

次のいずれかの処理が実行されます。

- InterChange Server Express のインストールを選択した場合
  - 前提条件が満たされていない場合は、エラー・メッセージが表示され、インストールは強制的に取り消されます。
  - 前提条件が満たされると、「RBAC」画面が表示されます。
- InterChange Server Express コンポーネントのインストールを選択しなかった場合は、「ネーム・サーバー構成」画面が表示されます。

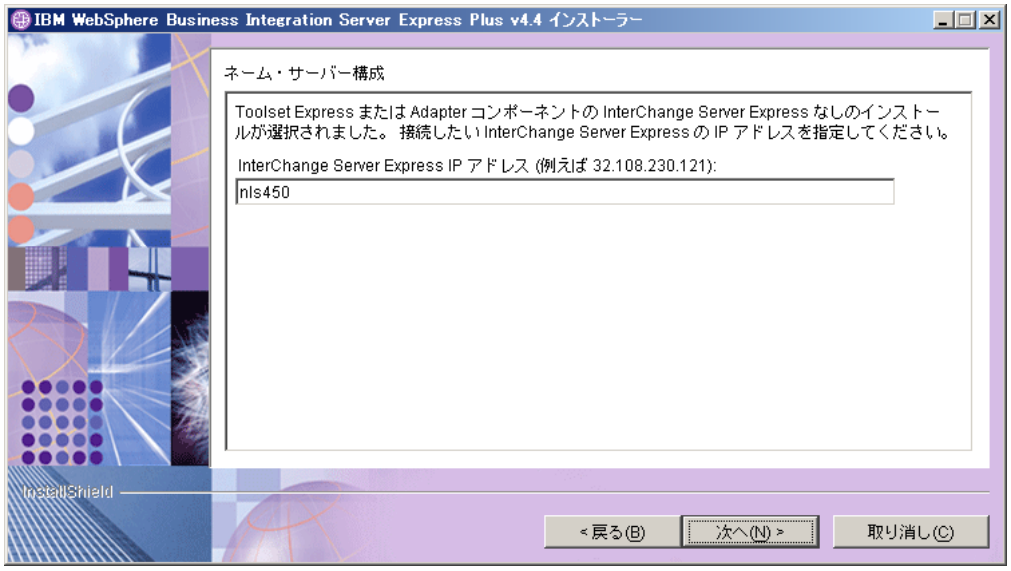

図 14. 「ネーム・サーバー構成」画面

「ネーム・サーバー構成」画面で、InterChange Server Express コンポーネントをインストールした (またはインストールする予定の) コンピューターの IP アドレスを入力して、「**次へ**」を選択します。これにより、インストール・プロセスが開始します。

ProductDir¥bin¥CWSharedEnv.bat ファイルの ORB_HOST キーには、この画面で入力した IP アドレスの値が入っています。この値を変更すると、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus による InterChange Server Express の検索場所が変更されます。

この手順が完了すると、「RBAC」画面が表示されます。ステップ 6 (15 ページ) に示すインストール手順を継続します。

ソフトウェア前提条件

「標準」インストールの場合、以下のコンポーネントは事前に指定されています。「カスタム」インストールの場合、必要な前提条件ソフトウェアは、インストールするコンポーネントに基づきます。一部またはすべてのコンポーネントがシステムにインストール済みかどうかが確認され、その分析結果は「ソフトウェア前提条件」画面に表示されます。

表 1 に、前提条件ソフトウェアを示します。画面に表示される表に含まれる項目がすべてになるか一部になるかは、選択したインストール・オプションに応じて異なります。

表 1. 考えられる前提条件ソフトウェア

前提条件ソフトウェア	説明
Java Development Kit 1.4.2	コラボレーション開発およびマッピング開発に必要です。
WebSphere MQ 5.3.0.2 (CSD07 以上の CSD レベル)	WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストールごとに必要です。
IBM DB2(R) Universal Database(TM) Express または Enterprise バージョン 8.1 (Fix Pack 5 (FP5) 以上)	サーバーの内容を格納するために必要です。
WebSphere Application Server バージョン 5.1.1 以上	System Monitor、Failed Event Manager、Web Deployment のいずれかをインストールする予定の場合に必要です。詳しくは、 51 ページの『第 8 章 Web ベース・ツールの手動構成』を参照してください。
Tomcat 4.1.24 および 4.1.27	System Monitor、Failed Event Manager、または Web Deployment をインストールする予定だが、WebSphere Application Server バージョン 5.1.1 またはそれ以上のバージョンを使用しない場合にのみ必要です。詳しくは、51 ページの『第 8 章 Web ベース・ツールの手動構成』を参照してください。
Web ブラウザー	System Monitor、Failed Event Manager、Web Deployment のいずれかを使用する予定の場合に必要です。

前に適切なバージョンのデータベースをインストール済みの場合は、 24 ページの『IBM DB2 Universal Database V8.2 Express』のセクションに示すように、これらのデータベースが正しく構成されていることを確認してください。

このシステムに前提条件ソフトウェアの旧バージョンがすでにインストールされている場合、Launchpad の動作の詳細と、バージョンに応じた必要な処理の詳細については、 61 ページの『第 9 章 システムのアップグレード』を参照してください。

データベースのインストールおよび構成

このセクションでは、データベースをインストールまたは構成するときに必要な場合がある追加情報を示します。

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus は、IBM DB2 Universal Database (UDB) Express または Enterprise バージョン 8.1 (FP5 以上)、および Microsoft SQL Server 2000 バージョン 8.00.384 (Service Pack 3) で使用できることが認証されています。

Microsoft SQL Server 2000 がインストールされている場合は、既存の Microsoft SQL Server 2000 のインストール環境を Launchpad によって構成するか、または

Microsoft SQL Server 2000 の代わりに IBM DB2 UDB Express バージョン 8.2 をインストールして構成するかを選択できます。

IBM DB2 Universal Database V8.2 Express

IBM DB2 UDB Express または Enterprise V8.1 (FP5 以上) と WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を組み合わせて使用することを計画している場合は、以下の情報が重要です。

データベースの最小必要要件の確認: DB2 Express または Enterprise は、次の基準を満たすように構成する必要があります。

- データベースおよび表作成特権を持つ WebSphere Business Integration Server Express 管理者ユーザーまたは Express Plus 管理者ユーザーが作成されている。
- データ・ファイルのディスク・スペースとして 50 MB が InterChange Server Express リポジトリー・データベースに使用できる。
- `maxappls` および `maxagents` パラメーターがそれぞれ 50 以上のユーザー接続で構成されている。
- マッピング・テーブル (オプション) 用表スペースが 50MB 以上のデータを格納できるように構成されている。
- アプリケーションの最大ヒープ・サイズが 2048 以上になるように構成されている。

注: DB2 ストアード・プロシージャーを作成するには、DB2 にサポートされている C または C++ コンパイラーが必要です。ストアード・プロシージャーの詳細については、DB2 資料を参照してください。

Launchpad によるデータベースのインストール: 以下の情報は、Launchpad を使用してデータベースをインストールするときに役立ちます。

- サポートされるデータベースがインストールされていない場合は、IBM DB2 UDB V8.2 Express のインストールを開始するためのボタンが表示されます。

  「カスタム」インストールを実行している場合は、ローカル・データベースまたはリモート・データベースを選択するオプションがあります。ローカル・データベースを使用する場合は、以下の手順に従います。

  1. 「**ローカル・データベースを使用**」を選択して、「**継続**」を選択します。
  2. 次の画面でユーザー名とパスワードを作成して、「**継続**」を選択します。

     この結果、Launchpad によってデータベースがインストールされ、構成されます。

  リモート・データベースを使用する場合は、以下の手順に従います。

  1. 「**リモート・データベースを使用**」を選択して、「**継続**」を選択します。
  2. リモート・データベースで使用されているユーザー名とパスワードを入力して、「**継続**」を選択します。

     注: リモート・データベースを使用するには、その前に有効な DB2 クライアントをインストールし、別名 SMB_DB を使用してリモート・データベースに接続しておく必要があります。

ここで、Launchpad により、リモートの SMB_DB データベースへの接続が確立できていることが検査されます。接続できない場合は、エラー・メッセージと、入力した情報を変更するためのオプションが表示されます。接続できる場合は、Launchpad によってデータベースが構成されます。

- IBM DB2 UDB Express または Enterprise V8.1 (FP5 以上) がインストールされている場合は、既存のインストール環境の構成を開始するためのボタンが表示されます。
- Windows マシンのユーザー ID と Windows ドメイン ID (使用している場合) が同一であることを確認します。Windows マシンのユーザー ID と Windows ドメイン ID が同一でない場合、DB2 のインストール処理は失敗します。
- IBM DB2 UDB Express の以前のインストール環境をアンインストール済みであり、今度は Launchpad を使用して再インストールする場合は、まず、ユーザーとパスワードのコントロール・パネルから以前の IBM DB2 UDB Express インスタンスをすべて削除してください。
- IBM DB2 UDB が正常に構成されると、データベースの構成が完了したというメッセージが表示されます。構成プロセスでは、以下の処理が行われます。
  - `SMB_DB` という名前のデータベースが作成されます。
  - ユーザー名とパスワードを作成できます。
  - `SMB_DB` 表に作成したユーザーに適切な権限が付与されます。

Microsoft SQL Server 2000

Microsoft SQL Server 2000 が正常に構成されると、データベースの構成が完了したというメッセージが表示されます。構成プロセスでは、以下の処理が行われます。

- `SMB_DB` という名前のデータベースが作成されます。
- `SMB_DB` 表に指定したユーザーに適切な権限が付与されます。

データベースの最小必要要件の確認: Microsoft SQL server 2000 は、次の最小基準を満たすように構成する必要があります。

- 表作成特権を持つ WebSphere Business Integration Server Express 管理者ユーザーまたは Express Plus 管理者ユーザーが作成されている。
- データ・ファイルのディスク・スペースとして 50 MB がリポジトリー・データベースに使用できる。
- 40 のユーザー接続が構成されている。
- マッピング・テーブル (オプション) 用としてディスク・スペース 50MB が使用可能である。
- ロギングが `Truncate Log on Checkpoint` で構成されている。

Web ブラウザーのインストール

Web ブラウザーは、Toolset Express のコンポーネントである System Monitor、Failed Event Manager、および Web Deployment をインストールする場合に必要です。Launchpad は、サポートされている Web ブラウザーを自動的にインストールすることはできませんが、サポートされているバージョンを検索する手順を示します。

サポートされている Web ブラウザーをインストールしていない状態で、そのインストール手順を表示する場合は、Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面で、「**Web ブラウザー**」の項目を展開します。この画面には、サポートされているブラウザーの入手先 Web サイトが表示されます。

First Steps の使用

First Steps アプリケーションは、単一のインターフェースで、これを使用して WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を使用および管理します。このアプリケーションは、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus がインストールされている場合、Windows インストーラーによってインストールされます。

First Steps は、Launchpad、CD、または Windows の「スタート」メニューから起動できます。First Steps を起動した時点で WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus がインストールされていなかった場合、First Steps の大半の機能は使用不可になり、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus 製品を先にインストールするよう指示されます。

このセクションでは、このアプリケーションの使用とその各種コンポーネントの詳細に関する情報を示します。

「プラットフォーム」(メニュー・バー)

(OS/400 および i5/OS で使用する場合のみ。) 「プラットフォーム」メニュー項目を使用すると、OS/400 または i5/OS システムと Windows システムの間で切り替えることができます。First Steps では、前回選択されていたプラットフォームが、次回の起動時に記憶されています。

注: この機能は、サーバーが OS/400 または i5/OS プラットフォーム上にインストールされている場合のみ使用されます。これらのプラットフォームでは、Windows システムからのリモート管理が必要です。First Steps は、OS/400 または i5/OS 上ではネイティブ・モードで動作しません。

「ようこそ」

「ようこそ」画面は、First Steps アプリケーションが起動すると、デフォルトで開きます。この画面には、次回にコンピューターがリブートしたときに First Steps を起動するかどうかを指定するためのチェック・ボックスがあります。このチェック・ボックスは、デフォルトで選択されています。このチェック・ボックスを選択したままにしておくと、First Steps は、始動時の Windows プログラム・マネージャー・メニューにショートカットを追加します。チェック・ボックスを選択解除すると、ショートカットがすでに存在する場合はショートカットが削除され、アプリケーションを初めて開く場合、ショートカットは組み込まれません。First Steps が CD から起動され、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus がまだマシンにインストールされていない場合、このチェック・ボックスは使用不可になります。

図 15. First Steps の「ようこそ」画面

「Quick Validate」

これをクリックすると、インストールが正常に完了したことの検証方法を説明する Quick Validate オンライン・ヘルプが表示されます。

「サーバーを始動」または「サーバーを停止」

これをクリックすると、InterChange Server Express が停止または始動します。サーバーを停止する場合は、InterChange Server Express のユーザー名とパスワードを求めるプロンプトが表示されます。

図 16. 「サーバーを始動」画面

「管理ツール」

これをクリックすると、「管理ツール」画面が開きます。この画面には、使用可能な管理ツールのリストと、各ツールの簡単な説明が表示されます。

これらのツールがインストールされていない場合、パネルには、管理ツールがインストールされていないことと、Launchpad を使用して管理ツールをインストールするよう求める記述が表示されます。

「開発ツール」

これをクリックすると、「開発ツール」画面が開きます。この画面には、使用可能な開発ツールのリストと、各ツールの簡単な説明が表示されます。

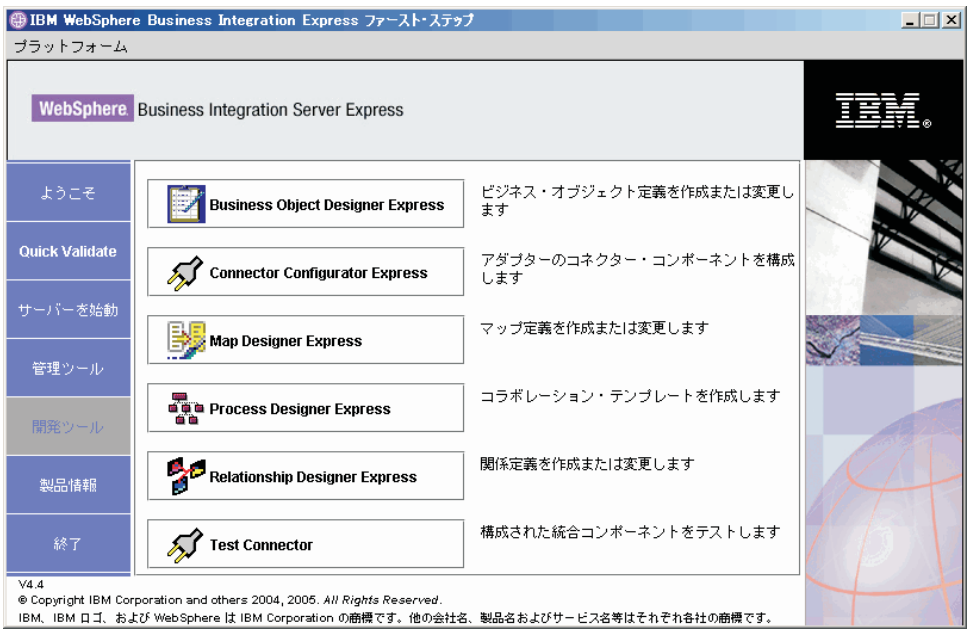

図 17. 「開発ツール」画面

「製品情報」

これをクリックすると、Web ブラウザーが起動し、WebSphere Business Integration Information Center の URL に移動します。

「終了」

これをクリックすると、First Steps アプリケーションが終了します。

WebSphere MQ サービスへのリスナーの追加

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールによってキュー・マネージャーが作成されました。以下の手順に従って WebSphere MQ リスナーを Windows サービスとして追加し、自動始動するように構成する必要があります。

1. 「**スタート**」>「**プログラム**」>「**IBM WebSphere MQ**」>「**WebSphere MQ エクスプローラー**」を選択し、WebSphere MQ エクスプローラーを起動します。
2. WebSphere MQ エクスプローラーの左ペインで、該当するキュー・マネージャー名を含むキュー・マネージャー・フォルダーを選択します。右ペインの「キュー・マネージャー状況」に、キュー・マネージャーの状況が「**実行中**」と表示されます。表示されない場合は、右ペインのキュー・マネージャー名を右マウス・ボタンでクリックし、ドロップダウン・リストから「**スタート**」を選択します。「キュー・マネージャー状況」が「**実行中**」に変わります。
3. WebSphere MQ サービスを開きます。それには、右ペインのキュー・マネージャー名を右マウス・ボタンでクリックし、ドロップダウン・リストから「**すべてのタスク**」>「**サービス**」を選択してください。

4. 「MQServices」ウィンドウの左ペインで、「コンソール・ルート (Console Root)」ツリーの下の「**WebSphere MQ サービス**」を展開し、キュー・マネージャーを選択します。

   右ペインには、特定キューとして、Queue Manager、Command Server、およびチャネル・イニシエーターの 3 項目がリスト表示されます。チャネル・イニシエーターが表示されない場合は、以下の手順を実行してください。

   a. 「MQServices」ウィンドウの左ペインで、「コンソール・ルート (Console Root)」ツリーの下のキュー・マネージャー名を右マウス・ボタンでクリックします。
   b. ドロップダウン・リストから、「**新規**」>「**チャネル・イニシエーター**」を選択します。
   c. 「チャネル・イニシエーター・サービスの作成 (Create Channel Initiator Service)」ダイアログで、デフォルト値をそのまま使用し、「**OK**」を選択します。

5. 各項目を右マウス・ボタンでクリックし、「**すべてのタスク**」>「**自動**」を選択して、始動モードを「**自動**」に構成します。
6. これらのサービスのいずれかが実行されていない場合は、各サービスを右マウス・ボタン・クリックし、「**すべてのタスク**」>「**開始**」を選択して、手動で始動します。
7. 左ペインの「コンソール・ルート (Console Root)」ツリーの下で、キュー・マネージャー名を右マウス・ボタン・クリックし、ドロップダウン・リストから「**新規**」>「**リスナー**」を選択して、リスナーを追加します。
8. 「リスナー・サービスの作成 (Create Listener Service)」ダイアログ・ボックスの「パラメーター」タブで、プロトコルに「`TCP`」 を選択し、ポート番号に「`1414`」を選択し、「**OK**」を選択します。

   各リスナーに固有のポート番号を使用する必要があります。デフォルトの 1414 とは別の番号をポートに割り当てて「**OK**」を選択します。

9. リスナーは、自動的に始動するように構成されている必要があります。そうでない場合は、リスナーを右クリックし、「**すべてのタスク**」>「**自動 (Automatic)**」を選択します。
10. リスナーを右マウス・ボタンでクリックし、「**すべてのタスク**」>「**開始**」を選択して、リスナーを手動で始動します。
11. 「MQServices」ウィンドウと「IBM WebSphere MQ エクスプローラー」を閉じます。変更を保管するかどうかを確認するプロンプトが表示されたら、「**はい**」をクリックします。

ディレクトリー構造およびファイル

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールが完了したら、結果のファイル・システムとその内容を表示できます。ディレクトリーは、デフォルトで `C:¥IBM¥WebSphereServer` ディレクトリー (本書では *`ProductDir`* と呼ぶ) の下に配置されます。

注: *`ProductDir`* に表示されるファイルおよびディレクトリーは、インストール時に選択したコンポーネントと使用中の Windows プラットフォームによって決まり

ます。ご使用の環境にあるファイルおよびディレクトリーは、以下にリストするファイルおよびディレクトリーとは異なります。

表 2. WebSphere Business Integration Server Express と Express Plus のインストール環境のディレクトリー構造

ディレクトリー名	内容
• _uninstWBIServerExp44 (WebSphere Business Integration Server Express インストール環境) • _uninstWBIServerExpPlus44 (WebSphere Business Integration Server Express Plus インストール環境)	このディレクトリーには、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を削除するときに使用する Java 仮想マシン (JVM) および uninstaller.exe ファイルが格納されています。
_uninstZip	このディレクトリーには、インストール中に unzip されたすべてのファイルのリストがあります。
AdapterJRE	このディレクトリーには、アダプターが使用する IBM Java ランタイム環境 (JRE) ファイルがあります。
bin	このディレクトリーには、システムが使用する実行可能ファイル、.dll ファイル、および .bat ファイルがあります。
collaborations	このディレクトリーには、インストールされたコラボレーションの .class ファイルやメッセージ・ファイルを格納するサブディレクトリーがあります。
connectors	このディレクトリーには、システムの各アダプターに固有のファイルがあります。アダプターがサポートするアプリケーションにインストールする必要があるアダプター固有ファイルもあります。
DataHandlers	このディレクトリーには、システムが使用するデータ・ハンドラーの .jar ファイルがあります。
DevelopmentKits	このディレクトリーには、開発者がさまざまなシステム・コンポーネントを作成する際に役立つサンプル・ファイルがあります。提供サンプルには、Server Access for EJB、Server Access for J2EE Connector Architecture、コネクター (C++ および Java)、Object Discovery Agents などがあります。
DLMs	このディレクトリーには、Dynamic Loadable Module (DLM)、および InterChange Server Express マップに関するその他のファイルを格納するサブディレクトリーがあります。
FirstSteps	QuickValidate ファイルと共に、First Steps ファイルが含まれます。
jre	このディレクトリーには、IBM JRE ファイルがあります。
legal	このディレクトリーにはライセンス・ファイルがあります。
lib	このディレクトリーにはシステム用の .jar ファイルがあります。
logs	このディレクトリーには、インストールまたはアンインストール時に表示されるエラーや警告がすべて格納されているログ・ファイルがあります。ファイル名は wbi_server_exp_install_log.txt です。

表 2. WebSphere Business Integration Server Express と Express Plus のインストール環境のディレクトリー構造 (続き)

ディレクトリー名	内容
messages	このディレクトリーには、生成されたメッセージ・ファイルがあります。
mqseries	このディレクトリーには WebSphere MQ 固有のファイル (一部実行可能ファイルを含む) があります。
ODA	このディレクトリーには、各エージェントのオブジェクト・ディスカバリー・エージェント .jar ファイルおよび .bat ファイルがあります。
plugins	このディレクトリーには、Toolset Express で必要な Eclipse プラグインがあります。
repository	このディレクトリーには、システム・コンポーネントの定義があります。
Samples	このディレクトリーには、ベンチマーク・サンプル用のコンポーネント定義、およびコラボレーション用のサンプル・メール・ファイルがあります。
src	このディレクトリーには、相互参照用の Relationship Service API のサンプルがあります。
templates	このディレクトリーには、start_connName.bat ファイルがあります。
Tools	このディレクトリーには、インストール時に選択された Workbench ファイルがあります。
WBFEM	このディレクトリーには、Failed Event Manager ファイルがあります。
wbiart	このディレクトリーには、アダプター・ランタイムに関するファイルがあります。
WBSM	このディレクトリーには System Monitor ファイルがあります。
WBWD	このディレクトリーには Web Deployment ファイルがあります。

初期インストール後の追加コンポーネントのインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をインストールした後に、追加コンポーネントをインストールすることができます。これを行うには、Launchpad の左側のパネルから「**製品のインストール**」ボタンを選択します。これにより Launchpad には、インストールするコンポーネントを選択する画面が表示されます (詳細については、 17 ページの『「カスタム」インストール』を参照)。特定の画面から一部のコンポーネントをすでにインストールした場合、選択画面は表示されますが、すでにインストールされたコンポーネントの横のチェック・ボックスは使用不可になります。

Launchpad は、新規 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus コンポーネントのインストールと同様に、追加ソフトウェア前提条件が必要かどうかを新規の選択内容に基づいて決定し、そのインストールをガイドします。

GUI を使用した WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール

IBM には、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus インストール全体を削除する、あるいは特定コンポーネントを選択して削除するアンインストール GUI プログラムがあります。アンインストーラー・プログラムは、前提条件ソフトウェアをアンインストールしません。前提条件ソフトウェアの削除は、特定の前提条件ソフトウェアに用意されている説明に従って、手動で行う必要があります。

注: アンインストールする前に、InterChange Server Express に関連しているプロセスが動作していないことを確認してください。プロセスが動作している場合は、それを停止します。これを実行する 1 つの方法としては、タスク・マネージャーを開き、これらのプロセスのうち、動作しているものがあるかどうかを確認します。プロセスが動作している場合は、それを停止します。その他のアプリケーションと関連しているプロセスを停止しないよう注意してください。

アンインストール GUI を実行するには、以下の作業を行います。

1. 「**スタート**」 > 「**設定**」 > 「**コントロール パネル**」を選択します。
2. 「**アプリケーションの追加と削除**」をダブルクリックします。
3. スクロールダウンして、(インストールされている製品により)「**IBM WebSphere Business Integration Server Express v4.4**」または「**IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus v4.4**」を選択し、「**変更と削除**」ボタンを選択します。

   注: 「**アプリケーションの追加と削除**」ツールには、アンインストール後に解放されるディスク・スペースの推定値が表示されますが、複数の製品が同じフォルダーにインストールされている場合は正確でない可能性があります。

   アンインストールの「ようこそ」画面が表示されます。
4. 「アンインストールへようこそ (Uninstallation Welcome)」画面で、「**次へ**」をクリックします。

   「アンインストール機能 (Uninstallation Feature)」画面が表示されます。インストール済みのコンポーネントの横にはチェックマークが付いています。
5. 「アンインストール機能 (Uninstallation Feature)」画面で、削除するコンポーネントを選択状態のままにして、「**次へ**」を選択します。

   「プリアンインストールの要約 (Pre-uninstallation Summary)」画面が表示されます。
6. 「プリアンインストールの要約 (Pre-uninstallation Summary)」画面で、「**次へ**」を選択して、選択内容を確定します。選択されたコンポーネントがアンインストーラーによって削除されます。

   「ポストアンインストールの終了 (post-uninstallation finish)」画面が表示されます。
7. 「ポストアンインストールの完了 (Post-uninstallation Finish)」画面で、「**完了**」を選択して、アンインストール GUI を終了します。

注: `C:¥IBM¥WebSphereServer` ディレクトリーは、場合によっては手動で削除する必要があります。

サイレント・アンインストールも使用できます。サイレント・アンインストールの実行手順については、 87 ページの『サイレント・インストールおよびアンインストール』を参照してください。

次のステップに進む

ソフトウェア前提条件や WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を正常にインストールしたら、 35 ページの『第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの始動および管理』に進みます。

最初に 35 ページの『第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの始動および管理』、次に 39 ページの『第 5 章 インストールの検証』の順で指示に従えば、WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールの Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールする予定の場合でも、基本システムが正しくインストールされ、正常に動作するかを、追加コンポーネントのインストール前に検証できます。

第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの始動および管理

システムを始動するには、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の InterChange Server Express コンポーネントを起動する必要があります。システムを効率よく管理するには、System Manager ツールを起動し、InterChange Server Express を System Manager に登録する必要があります。System Manager は、InterChange Server Express と同じマシン、または異なるマシンに常駐できます。

注: この章で説明されているタスクは、First Stepsアプリケーションか、または Windows の「スタート」メニューから実行できます。この章では、Windows の「スタート」メニューからさまざまなコンポーネントを開始する方法について説明します。First Steps から開始しても構いません。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動』
- 『InterChange Server Express のセットアップ』
- 37 ページの『次のステップに進む』

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を始動するには、以下の手順に従います。

1. **「スタート」>「プログラム」>「IBM WebSphere Business Integration Express」>「InterChange Server Express」>「InterChange Server Express を始動」**を選択します。以下の処理が発生します。
   - Persistent Naming Server が始動します。
   - InterChange Server Express が始動します。

   コマンド・ウィンドウが開き、システムの準備ができると以下のメッセージが表示されます。

   ```
   The WBIServer WebSphereICS service was started successfully.
   ```
2. 任意のキーを押してコマンド・ウィンドウを閉じます。

InterChange Server Express のセットアップ

InterChange Server Express を効率的に管理するには、InterChange Server Express を System Manager に登録し、System Manager を通じて InterChange Server Express に接続する必要があります。以下のセクションでは、これらのタスクを実行する方法について説明します。

- 36 ページの『System Manager の始動』
- 36 ページの『InterChange Server Express を System Manager に登録する』

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

- 『InterChange Server Express への接続』
- 37 ページの『InterChange Server Express のパスワードの変更』
- 37 ページの『InterChange Server Express の再始動』

System Manager の始動

System Manager は、InterChange Server Express およびリポジトリーとの GUI です。

System Manager を始動するには、「**スタート**」>「**プログラム**」>「**IBM WebSphere Business Integration Express**」>「**Toolset Express**」>「**管理**」>「**System Manager**」を選択します。

注: System Manager パースペクティブがデフォルトで表示されます。表示されない場合は、WebSphere WorkBench メニュー・バーで「**ウィンドウ**」 > 「**パースペクティブを開く**」 > 「**その他**」を選択して、「**System Manager**」をダブルクリックすれば、System Manager が始動します。

InterChange Server Express を System Manager に登録する

System Manager では、InterChange Server Express のインスタンスを管理できます。管理したいインスタンスは、System Manager に登録する必要があります。サーバーを登録すると、その名前は、サーバーが削除されない限り常に System Manager に表示されます。

InterChange Server Express インスタンスを登録するには、以下のステップに従います。

1. System Manager で、左ペインの「**InterChange Server インスタンス**」を右マウス・ボタンでクリックして、「**サーバーを登録**」を選択します。
2. 「**新規サーバーを登録**」ダイアログ・ボックスで、InterChange Server Express の名前をブラウズするか、入力します。

   注: 統合テスト環境でサーバーを使用する予定の場合は、「**テスト・サーバー**」チェック・ボックスを選択します。統合テスト環境は、ローカル・テスト・サーバーとして登録されているサーバーとのみ通信します。
3. ユーザー名とパスワードを入力して、「**ユーザー ID およびパスワードを保管**」チェック・ボックスを選択します。このユーザー名とパスワードは、Launchpad インストール・プロセス中に「RBAC」画面で入力したユーザー名とパスワードと同じにする必要があります。
4. 「**OK**」を選択します。

   サーバー名が System Manager ウィンドウの左側に表示されます。表示されない場合は、「InterChange Server インスタンス」フォルダーを展開してください。

InterChange Server Express への接続

登録された InterChange Server Express が稼働していることを、接続によって検証します。System Manager を使用して InterChange Server Express に接続するには、以下のステップに従います。

1. System Manager で、左ペインにある InterChange Server Express の名前を右マウス・ボタンでクリックして、「**接続**」を選択します。
2. 「サーバー・ユーザー ID およびパスワード」確認画面で「**OK**」を選択します。

ヒント: System Manager の左ペインにある InterChange Server Express の名前の横のアイコンが緑色であれば、InterChange Server Express はすでに System Manager に接続しています。

InterChange Server Express のパスワードの変更

InterChange Server Express は、InterChange Server Express 管理者だけが知っているパスワードによって保護されます。このパスワードは、インストール時に「RBAC」画面で作成されました。セキュリティー上の理由でパスワードを変更する場合は、システムのセットアップ後に変更できます。

InterChange Server Express のパスワードを変更するには、以下のステップに従います。

1. System Manager で、左ペインの InterChange Server Express 名を右マウス・ボタンでクリックして、「**パスワードのリセット**」を選択します。
2. ダイアログが開くので、その中でユーザー名を選択して、旧パスワードおよび新規パスワードを入力し、確認のために新規パスワードを再入力して、「**OK**」を選択します。

InterChange Server Express の再始動

パスワードの変更を有効にするには、InterChange Server Express をシャットダウンして再始動する必要があります。その手順は以下のとおりです。

1. System Manager で、左ペインにある稼働中の InterChange Server Express 名を右マウス・ボタンでクリックして、「**シャットダウン**」を選択します。
2. 「サーバーをシャットダウン」ダイアログ・ボックスで、現在の作業が完了してから正常にサーバーをシャットダウンするか、クリーンアップを実行せずにただちにサーバーをシャットダウンします。

   「**正常**」を選択して、「**OK**」を選択します。

   注: 待たずにサーバーをシャットダウンする必要がある場合のみ、「**即時に**」を選択してください。
3. 「**スタート**」>「**プログラム**」>「**IBM WebSphere Business Integration Express**」>「**InterChange Server Express**」>「**InterChange Server Express を始動**」を選択して、InterChange Server Express を再始動します。
4. System Manager で InterChange Server Express 名を右マウス・ボタンでクリックして、InterChange Server Express に接続します。ダイアログが開くので、その中でサーバーのユーザー名とパスワードを入力して、「**OK**」を選択します。

次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールは完了しました。以下のいずれかを実行します。

- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールした場合に、インストールが正しく行われ、正常に動作することを検証するには、39 ページの『第 5 章 インストールの検証』に進みます。
- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールしなかった場合は、次のいずれかを行います。
  - WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールのオプションの Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がない場合は、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進んで、インストール時に選択したアダプターの構成の詳細を参照してください。
  - オプションの Adapter Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、41 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』に進みます。
  - オプションの Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、45 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に進みます。
- WebSphere Business Integration Server Express V4.4 をインストール済みで、Express Plus V4.4 にアップグレードする場合は、61 ページの『第 9 章 システムのアップグレード』に記載されている情報を参照してください。

第 5 章 インストールの検証

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールした場合は、System Test と呼ばれるサンプルが得られます。このサンプルを使用すると、インストールしたシステムの動作を検証できます。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『Quick Validate』
- 『次のステップに進む』

Quick Validate

システムが正常にインストールされ、稼働していることを確認するには、System Test サンプルを実行します。サンプルの実行に関する説明は、First Steps の「**Quick Validate**」ボタンを選択すると使用できるようになる、Quick Validate オンライン・ヘルプから参照できます。

注: 先に System Test サンプルを実行してから Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールすることをお勧めします。

サンプルを正常に実行したら、このセクションに戻り、『次のステップに進む』の内容をよく読んでください。

次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールは完了し、確認されました。以下のいずれかを実行します。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールのオプションの Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がない場合は、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進んで、インストール時に選択したアダプターの構成の詳細を参照してください。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールのオプションの Adapter Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、41 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』に進んでください。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストールのオプションの Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、45 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に進んでください。
- WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 をインストール済みで、Express Plus V4.3.1 にアップグレードする場合は、61 ページの『第 9 章 システムのアップグレード』に記載されている情報を参照してください。

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール

Launchpad は、Adapter Capacity Pack からのアプリケーション・アダプターのインストールをガイドする GUI インストーラーを起動するための方法を提供します。2 番目の GUI も用意されており、製品をアンインストールするときに使用します。サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールも可能です。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『GUI による Adapter Capacity Pack のインストール』
- 44 ページの『GUI による Adapter Capacity Pack のアンインストール』
- 44 ページの『次のステップに進む』

サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールの実行手順については、87 ページの『サイレント・インストールおよびアンインストール』を参照してください。

GUI による Adapter Capacity Pack のインストール

Adapter Capacity Pack からアプリケーション・アダプターを正常にインストールするには、ご使用のシステムが次に示す前提条件を満足する必要があります。

- アダプターをアップグレードするマシンに対する管理者特権が必要です。
- マシンの Windows オペレーティング・システムは、Windows 2003 である必要があります。
- WebSphere Business Integration Server Express は、アダプターのインストール先マシンと同じマシンにはインストールできません。 (Adapter Capacity Pack に付属のアダプターと組み合わせて使用できるのは、既存の WebSphere Business Integration Server Express Plus インストール環境のみです。)
- アダプターを InterChange Server Express と同じマシンにインストールしない場合は、アダプターのインストール先である同じマシンに WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD07 Client のインストール環境が存在する必要があります。

Adapter Capacity Pack で提供されるインストール GUI は、一度に 1 つのアダプターのみをインストールします (したがって、Adapter Capacity Pack のインストーラーは、インストールするアダプターごとに別個に実行する必要があります)。アダプターのリストについては、43 ページの『インストールするアダプターの決定』のセクションを参照してください。インストール GUI により、アダプターもサービスとして構成されます。

Launchpad を呼び出してインストール GUI を起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の左側の列から、「**Capacity Pack のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

   2 つのボタンがある「Capacity Pack のインストール」画面が表示されます。

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

2. 「**Adapter Capacity Pack のインストール**」を選択して GUI を起動し、Adapter Capacity Pack からアプリケーション・アダプターをインストールします。

   「ようこそ」画面が表示されます。
3. 「ようこそ」画面で、「**次へ**」をクリックします。

   「ソフトウェア・ライセンス情報」画面が表示されます。
4. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**使用条件の条項に同意します**」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「**次へ**」を選択します。

   インストーラーは、このセクションの先頭に記載されている前提条件に適合しているかどうかを検査します。不適合条件がある場合は、「**キャンセル**」ボタンを選択してインストールを取り消すことを強制されます。すべての前提条件が適合していた場合は、「フィーチャー (Feature)」画面が表示されます。
5. 「フィーチャー (Feature)」画面で、使用可能なアダプターのリストから、名前の横にあるラジオ・ボタンを選択して、アダプターを 1 つ選択し、「**次へ**」をクリックします。どのアダプターを選択するかの詳細については、43 ページの『インストールするアダプターの決定』のセクションを参照してください。

   次のいずれかの画面が表示されます。
   - InterChange Server Express がローカル・マシンにインストールされている場合は、「プリインストールの要約 (Pre-installation Summary)」画面が表示されます。この場合は、ステップ 8 (43 ページ) に進んでください。
   - InterChange Server Express がリモート・マシンに存在する場合は、「サーバー IP アドレスの構成」画面が表示されます。この場合は、ステップ 6 に進んでください。
6. 「サーバー IP アドレスの構成」画面で、InterChange Server Express をインストールしたコンピューターの IP アドレスを入力します。InterChange Server Express が OS/400 または i5/OS システムにインストールされている場合は、「**InterChange Server Express が OS/400 上にある**」という項目の横にあるチェック・ボックスを選択します。次に、「**次へ**」を選択します。

   次のいずれかの画面が表示されます。
   - 「InterChange Server Express が OS/400 または i5/OS 上にある (InterChange Server Express is on OS/400 or i5/OS)」という項目の横にあるチェック・ボックスを選択した場合は、「サーバー名の構成」画面が表示されます。この場合は、ステップ 7 に進んでください。
   - 「InterChange Server Express が OS/400 または i5/OS 上にある (InterChange Server Express is on OS/400 or i5/OS)」という項目の横にあるチェック・ボックスを選択しなかった場合は、ステップ 8 (43 ページ) に進んでください。
7. 「サーバー名の構成」画面で、次の手順を実行します。
   a. OS/400 または i5/OS システムの InterChange Server Express インスタンスの名前を入力します。(デフォルトは `QWBIDFT44` です。インスタンスに別の名前を付けた場合は、その名前を入力します。)
   b. ORB ポート番号を入力します。 (デフォルトは `14500` です。別のポート番号を使用した場合は、その番号を入力します。)

次に、「**次へ**」を選択します。

「プリインストールの要約 (Pre-installation Summary)」画面が表示されます。

8. 「プリインストールの要約 (Pre-installation Summary)」画面で、選択内容とインストールの場所を見直し、「**次へ**」をクリックします。

   インストーラーは、インストールに十分なディスク・スペースがあることを検査します。その後、インストールは次のように進行します。

   - 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「**次へ**」ボタンが使用不可になります。この場合は、「**戻る**」を選択して、指定のドライブ上のスペースをある程度解放する必要があります。
   - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。「ポストインストールの要約 (Post-installation Summary)」画面が表示され、プロセスが正常に実行されたか、または問題が検出されたことが示されます。

9. 「ポストインストールの要約 (Post-installation Summary)」画面で、「**完了**」を選択して、インストール GUI を終了します。

インストールするアダプターの決定

Adapter Capacity Pack インストーラーを実行すると、次の中からアダプターのコンポーネントを 1 つ選択できます。

- Adapter for i2
- Adapter for JD Edwards OneWorld
- Adapter for eMatrix
- Adapter for mySAP.com
- Adapter for Oracle Applications
- Adapter for PeopleSoft
- Adapter for Siebel eBusiness Applications
- Adapter for WebSphere Commerce

注: 一部のアダプターには対応する Object Discovery Agents (ODA) があり、それらのアダプターが選択されると、その ODA がインストールされます。いずれのアダプターを選択した場合も、次のコンポーネントがインストールされます。

- Data Handler for Complex Data
- Data Handler for EDI
- Data Handler for XML
- アダプター・フレームワーク

個々のアダプターの説明については、Web サイト `http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter` にあるアダプターの資料を参照してください。

GUI による Adapter Capacity Pack のアンインストール

IBM では、Adapter Capacity Pack のインストール環境を削除するためのアンインストール GUI プログラムを用意しています。

アンインストール GUI を実行するには、以下の作業を行います。

1. 「**スタート**」 > 「**設定**」 > 「**コントロール パネル**」を選択します。
2. 「**アプリケーションの追加と削除**」をダブルクリックします。
3. スクロールダウンして「**Adapter Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1**」を選択し、「**変更と削除**」ボタンを選択します。

   注: 「**アプリケーションの追加と削除**」ツールには、アンインストール後に解放されるディスク・スペースの推定値が表示されますが、複数の製品が同じフォルダーにインストールされている場合は正確でない可能性があります。

   アンインストールの「ようこそ」画面が表示されます。
4. 「アンインストールへようこそ (Uninstallation Welcome)」画面で、「**次へ**」をクリックします。

   「アンインストール機能 (Uninstallation Feature)」画面が表示されます。インストール済みのコンポーネントの横にはチェックマークが付いています。
5. 「アンインストール機能 (Uninstallation Feature)」画面で、削除するコンポーネントを選択状態のままにして、「**次へ**」を選択します。

   「プリアンインストールの要約 (Pre-uninstallation Summary)」画面が表示されます。
6. 「プリアンインストールの要約 (Pre-uninstallation Summary)」画面で、「**次へ**」をクリックします。

   選択されたコンポーネントがアンインストーラーによって削除され、「ポストアンインストール・サマリー (Post-uninstallation Summary)」画面が表示されます。
7. 「ポストアンインストールの要約 (Post-uninstallation Summary)」画面で、「**完了**」を選択して、アンインストール GUI を終了します。

次のステップに進む

Collaboration Capacity Pack からのコラボレーションのインストールを計画しているかどうかに応じて、次のいずれかを実行します。

- Collaboration Capacity Pack からコラボレーションをインストールする必要がある場合は、45 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に進みます。
- Collaboration Capacity Pack からコラボレーションをインストールする必要がない場合は、WebSphere Business Integration Server Express Plus およびこの Adapter Capacity Pack のインストール時に選択したアダプターの構成に関する情報を得るために、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進んでください。

第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール

Collaboration Capacity Pack からオプションのコラボレーションをインストールすると、WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境で、いずれかの コラボレーション・グループを使用できるようになります。(Collaboration Capacity Pack のコラボレーションは、WebSphere Business Integration Server Express のインストール環境では使用できません。) WebSphere Business Integration Server Express Plus の 1 つのインストール環境と組み合わせて使用するためにインストールできる Collaboration Capacity Pack のコラボレーションは、1 つだけです。

Launchpad は、Collaboration Capacity Pack からのコラボレーションのインストールをガイドする GUI インストーラーを起動するための方法を提供します。2 番目の GUI も用意されており、製品をアンインストールするときに使用します。サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールも可能です。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『GUI による Collaboration Capacity Pack のインストール』
- 48 ページの『GUI による Collaboration Capacity Pack のアンインストール』
- 49 ページの『次のステップに進む』

サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールの実行手順については、 87 ページの『サイレント・インストールおよびアンインストール』を参照してください。

GUI による Collaboration Capacity Pack のインストール

Collaboration Capacity Pack からコラボレーションを正常にインストールするには、ご使用のシステムが次に示す前提条件を満足する必要があります。

- Collaboration Capacity Pack のコラボレーションをインストールするマシン上で、管理者特権を保有している必要があります。
- Collaboration Capacity Pack からコラボレーションをインストールするマシンには、あらかじめ WebSphere Business Integration Server Express Plus をインストールしておく必要があります (Collaboration Capacity Pack のコラボレーションは、WebSphere Business Integration Server Express のインストール環境にはインストールできません)。
- Collaboration Capacity Pack のコラボレーションは、InterChange Server Express のインストール先と同じマシンにインストールする必要があります。
- マシン上の Collaboration Capacity Pack の既存のコラボレーションを保持することはできません。
- InterChange Server Express は、*稼働状態*にできません。

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

Collaboration Capacity Pack のインストール GUI を使用すると、選択したコラボレーション・グループがインストールされ、インストールされた内容が InterChange Server Express に配置されます。

Launchpad を呼び出してこのインストール GUI を起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad で、「**Capacity Pack のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

   2 つのボタンがある「Capacity Pack のインストール」画面が表示されます。
2. 「**Collaboration Capacity Pack のインストール**」を選択して GUI を起動し、Collaboration Capacity Pack からコラボレーションをインストールします。Launchpad は、最初に、WebSphere Business Integration Server Express Plus の InterChange Server Express コンポーネントがローカル・マシンにインストールされているかどうかを検査します。次に、以下のように動作します。
   - InterChange Server Express コンポーネントがローカル・マシンにインストールされていない場合は、インストールが失敗する可能性があることを警告ダイアログによって警告します。「**キャンセル**」を選択してインストールを取り消すか、または「**インストール**」を選択して、インストールを継続します。インストールの継続を選択した場合は、「ようこそ」画面が表示されます。
   - InterChange Server Express がローカル・マシンにインストールされている場合は、「ようこそ」画面が表示されます。
3. 「ようこそ」画面で、「**次へ**」をクリックします。

   「ソフトウェア・ライセンス情報」画面が表示されます。
4. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**使用条件の条項に同意します**」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「**次へ**」を選択します。

   インストーラーは、このセクションの先頭に記載されている前提条件に適合しているかどうかを検査します。不適合条件がある場合は、「**キャンセル**」ボタンを選択してインストールを取り消すことを強制されます。すべての前提条件が適合していた場合は、「フィーチャー (Feature)」画面が表示されます。
5. 「フィーチャー (Feature)」画面で、使用可能なコラボレーション・グループのリストから、名前の横にあるラジオ・ボタンを選択して、コラボレーション・グループを 1 つ選択し、「**次へ**」をクリックします。この画面から選択できるコラボレーション・グループの詳細については、47 ページの『インストールするコラボレーション・グループの決定』を参照してください。

   「RBAC 情報」画面が表示されます。
6. 「RBAC 情報」画面で、Role-Based Access Control (RBAC) を使用可能にしたかどうかを示すよう求められます。以下のいずれかのオプションを実行します。
   - RBAC が使用可能になっている場合は、「**はい**」の横にあるラジオ・ボタンを選択して、インストール・プロセス中に作成したユーザー名とパスワードの情報を入力します。次に、「**次へ**」を選択します。Launchpad により、入力した情報が検査されます。

- RBAC が使用可能になっていない場合は、「**いいえ**」の横にあるラジオ・ボタンを選択して、「**次へ**」を選択します。Launchpad により、RBAC が使用可能になっていないことが検査されます。RBAC が使用可能であることが確認されると、ユーザー名とパスワードを入力するよう求められます。RBAC が使用可能になっていない場合は、インストール・プロセスが継続されます。

「プリインストールの要約 (Pre-installation Summary)」画面が表示されます。

7. 「プリインストールの要約 (Pre-installation Summary)」画面で、選択内容とインストールの場所を見直し、「**次へ**」をクリックします。

   インストーラーは、インストールに十分なディスク・スペースがあることを検査します。その後、インストールは次のように進行します。

   - 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「**次へ**」ボタンが使用不可になります。この場合は、「**戻る**」を選択して、指定のドライブ上の不要なスペースをいくつか削除する必要があります。
   - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストールの要約 (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。

8. 「ポストインストールの要約 (Post-installation Summary)」画面で、「**完了**」を選択して、インストール GUI を終了します。

インストールするコラボレーション・グループの決定

Collaboration Capacity Pack からコラボレーションをインストールすると、次の中からコラボレーション・グループを 1 つ選択できます。

- Collaborations for Customer Relationship Management V1.0
- Collaborations for Financials and Human Resources V1.0
- Collaborations for Order Management V1.0
- Collaborations for Procurement V1.0

各コラボレーション・グループは、次に示す個別のコラボレーションを複数集めて構成されます。

- Collaborations for Customer Relationship Management V1.0
  - Collaboration for Contact Manager
  - Collaboration for Contract Sync
  - Collaboration for Customer Manager
  - Collaboration for Customer Credit Manager
  - Collaboration for Installed Product
  - Collaboration for Billing Inquiry
  - Collaboration for Vendor Manager
- Collaborations for Financials and Human Resources V1.0
  - Collaboration for AR Invoice Sync
  - Collaboration for Department Manager
  - Collaboration for Employee Manager

  - Collaboration for GL Movement
  - Collaboration for Invoice Generation
- Collaborations for Order Management V1.0
  - Collaboration for ATP To Sales Order
  - Collaboration for Available To Promise
  - Collaboration for Item Manager
  - Collaboration for Price List Manager
  - Collaboration for Sales Order Processing
  - Collaboration for Order Billing Status
  - Collaboration for Order Delivery Status
  - Collaboration for Order Status
  - Collaboration for Return Billing Status
  - Collaboration for Return Delivery Status
  - Collaboration for Return Status
  - Collaboration for Contact Manager
  - Collaboration for Customer Manager
  - Collaboration for Trading Partner Order Management
- Collaborations for Procurement V1.0
  - Collaboration for Inventory Level Manager
  - Collaboration for Inventory Movement
  - Collaboration for BOM Manager
  - Collaboration for Purchasing
  - Collaboration for Vendor Manager

インストーラーは、対象のコラボレーション・グループに関連するすべてのファイルをインストールします。これには、すべてのコラボレーションが使用する一連の汎用ビジネス・オブジェクトも含まれます。個々のコラボレーションに関する資料は、`http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter` でダウンロード、インストール、および表示することができます。

GUI による Collaboration Capacity Pack のアンインストール

IBM では、Collaboration Capacity Pack のインストール環境を削除するためのアンインストール GUI プログラムを用意しています。アンインストール GUI を実行するには、以下の作業を行います。

1. 「**スタート**」 > 「**設定**」 > 「**コントロール パネル**」を選択します。
2. 「**アプリケーションの追加と削除**」をダブルクリックします。
3. スクロールダウンして、「**Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.4**」を選択し、「**変更と削除**」 ボタンを選択します。

注: 「**アプリケーションの追加と削除**」ツールには、アンインストール後に解放されるディスク・スペースの推定値が表示されますが、複数の製品が同じフォルダーにインストールされている場合は正確でない可能性があります。

アンインストールの「ようこそ」画面が表示されます。

4. 「アンインストールへようこそ (Uninstallation Welcome)」画面で、「**次へ**」をクリックします。

   「プリアンインストールの要約 (Pre-uninstallation Summary)」画面が表示されます。

5. 「プリアンインストールの要約 (Pre-uninstallation Summary)」画面で、「**次へ**」をクリックします。アンインストーラーによってコンポーネントが削除されます。

   「ポストアンインストールの要約 (Post-uninstallation Summary)」画面が表示されます。

6. 「ポストアンインストールの要約 (Post-uninstallation Summary)」画面で、「**完了**」を選択して、アンインストール GUI を終了します。

次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のコラボレーションのインストールが成功したら、以下の情報を得るために「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進みます。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール時に選択したアダプター、または Adapter Capacity Pack のオプションのアダプターの構成。
- コラボレーション・オブジェクト、ビジネス・オブジェクト、およびマップの構成。
- リポジトリーへのオブジェクトの配置。

第 8 章 Web ベース・ツールの手動構成

この章で説明する Web ベース・ツールを構成する要素は、次のとおりです。

- System Monitor
- Failed Event Manager (System Monitor に統合)
- Web Deployment
- Collaboration Enablement for Portal

この章の内容は以下のとおりです。

- 53 ページの『WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を使用するための Web ベース・ツールの構成』
- 56 ページの『Tomcat を使用するための Web ベース・ツールの構成』
- 58 ページの『Collaboration Enablement for Portal の構成』
- 59 ページの『次のステップに進む』

重要: この章の説明に従うのは、Toolset Express の Web ベース・ツール・コンポーネントを使用する予定で、同時に次の条件が満たされている場合のみにしてください。

- WebSphere Application Server バージョン 5.1.1 以上あるいは WebSphere Application Server Express 5.1.1 以上を Web アプリケーション・サーバーとして使用しているが、これらをインストールしたのは WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をインストールした後である場合。この場合は、53 ページの『WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を使用するための Web ベース・ツールの構成』のセクションを参照してください。
- Tomcat 4.1.24 および 4.1.27 を Web アプリケーション・サーバーとして使用している場合。この場合は、56 ページの『Tomcat を使用するための Web ベース・ツールの構成』のセクションを参照してください。

サポートされているバージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express が使用システム上で終了した後に、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の Toolset Express コンポーネントをインストールした場合は、この章の説明に従う必要はありません。この場合、Web ベース・ツールは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express と連動するように、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストーラーによって自動的にインストールされ、構成されます。

この自動構成では、IBM HTTP Server などの Web サーバーがインストールされていないことを前提にしています。作成されるアプリケーション・サーバーの名前は、ICSMonitor です。Web ベース・ツールは、デフォルトのポート番号である 7089 を使用するよう構成されます。System Monitor と Failed

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

Event には、URL `http://hostname:7089/ICSMonitor` でアクセスできます。Web Deployment の場合は、URL `http://hostname:7089/WebDeployment` です。

Web ベース・ツールについて

注: Web ベース・ツールを構成する要素は、次のとおりです。

- System Monitor
- Failed Event Manager
- Web Deployment
- Collaboration Enablement for Portal

System Monitor

System Monitor とは、WebSphere Business Integration Server Express システムまたは Express Plus システムを Web からモニターするためのツールです。System Monitor を使用すると、データの表示方法や、現在のデータに加えて履歴データをどのように表示するかを構成できます。

Failed Event Manager

Failed Event Manager (System Monitor から起動される) とは、WebSphere Business Integration Server Express システムまたは Express Plus システムで失敗したイベントを Web から処理し、失敗したイベントへの役割ベースのアクセスを提供する (Tomcat 4.1.24 以上を使用するシステムの場合のみ) ためのツールです。Failed Event Manager のセキュリティーを構成してカスタムの役割を作成する方法の詳細については、「*システム管理ガイド*」を参照してください。

Web Deployment

Web Deployment とは、Web ベース・アプリケーションの 1 つであり、これを使用すると、ユーザーは HTTP/S (ファイアウォールを容易にバイパスするとして知られているプロトコル) を介してリポジトリー・ファイルのコンポーネントを InterChange サーバーに配置したり、InterChange サーバーのコンポーネントをインポートしてリポジトリー・ファイルに戻したりすることができます。配置プロセスとインポート・プロセスには、どちらも、ユーザーが配置またはインポートに必要なコンポーネントの一部またはすべてを選択するためのブラウザー・ベースのユーザー・インターフェースが用意されています。

Collaboration Enablement for Portal

WebSphere Business Integration Server Express は、異種のアプリケーションを使用して運営される業務向けの統合ソリューションを提供します。Collaboration Enablement for Portal とは、InterChange Server Express に統合計画を組み込み、ポートレットのプレゼンテーション層を Web ビジネス・オブジェクトを使用して InterChange Server Express ロジックに接続するための手段です。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を使用するための Web ベース・ツールの構成

このセクションでは、Web ベース・ツールを構成して、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を使用する方法について説明します。Tomcat を使用する手順の説明については、56 ページの『Tomcat を使用するための Web ベース・ツールの構成』を参照してください。

Web ベース・ツールを構成して WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を使用するには、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus に付属のスクリプトを実行します。このスクリプトは `CWDashboard.bat` このスクリプトは *`ProductDir`*`¥bin` に置かれています (*`ProductDir`* は、デフォルトではディレクトリー `C:¥IBM¥WebSphereServer` を表します)。このスクリプトを実行すると、IBM HTTP Web Server などの Web サーバーとツールを連動させるかどうかを構成できます。

先に進む前に、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express バージョン 5.1.1 以上がインストール済みであることを確認します。(WebSphere Application Server Express バージョン 6 は、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の Launchpad からインストールできます。) 次に、使用環境で Web サーバーを使用するかしないかに応じて、次のいずれかのセクションに進みます。

- 『Web サーバー使用時の Web ベース・ツールの構成』
- 54 ページの『Web サーバー不使用時の Web ベース・ツールの構成』

Web サーバー使用時の Web ベース・ツールの構成

WebSphere Application Server には、Web サーバーが付属しています。しかし、WebSphere Application Server Express には付属していません。WebSphere Application Server Express を使用していて、Web サーバーを使用する場合は、IBM HTTP Server (IBM Web サイトから無料で入手可能) および WebSphere Application Server Express の Web サーバー・プラグインを入手してインストールする必要があります。詳細については、WebSphere Application Server Express の資料を参照してください。

Web ベース・ツールを構成して Web サーバーを使用するには、以下の手順を実行します。

1. 以下のパラメーターを指定して `CWDashboard.bat` を実行します。
   - WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express のインストール・パス。例えば、`C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥Express60¥AppServer`
   - インストール先となるマシンの完全修飾ホスト名。例えば、`hostname.ibm.com`
   - WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール・ディレクトリー。例えば、`C:¥IBM¥WebSphereServer`
   - インストール済みの WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムで DB2 を使用している場合は、DB2 インストールの `java` ディレクトリーへのパスを指定します。例えば、`C:¥Program Files¥IBM¥SQLLIB¥java` のようになります。インストール済みの WebSphere

Business Integration Server Express または Express Plus システムで別のデータベースが使用されている場合は、このパラメーターに null 値を使用します。

- y (HTTP サーバーの場合は yes)

コマンド例を 2 つ示します。

- データベースとして DB2 を使用する場合:

```
C:¥IBM¥WebSphereServer¥bin¥CWDashboard.bat                /
"C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥Express60¥AppServer"     /
hostname.ibm.com "C:¥IBM¥WebSphereServer"                 /
"C:¥Program Files¥IBM¥SQLLIB¥java" y
```

- データベースとして Microsoft SQL Server を使用する場合:

```
C:¥IBM¥WebSphereServer¥bin¥CWDashboard.bat                /
"C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥Express60¥AppServer"     /
hostname.ibm.com "C:¥IBM¥WebSphereServer" null y
```

重要: この手順中のいくつかのステップでは、1 つ以上の行でコマンドが改行され、その部分がスラッシュ (/) で示されています。これらの改行が挿入されたのは、ページ内にテキストが収まるようにするためです。実際にコマンドを入力する場合は、これらの箇所に改行ではなくスペースを挿入してください。

2. WebSphere 管理者のコンソールから左ナビゲーション・ペインの「**環境**」を展開し、「**Web サーバー・プラグインの更新**」リンクをクリックし、「**OK**」をクリックします。
3. ICSMonitor Application Server が始動している場合は、コマンド行から停止します。

```
C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥Express60¥AppServer¥bin¥stopServer.bat  /
ICSMonitor
```

4. 以下のようにコマンド行から ICSMonitor Application Server を始動します。

```
C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥Express60¥AppServer¥bin¥startServer.bat  /
ICSMonitor
```

5. System Monitor または Failed Event Manager にアクセスするには、次の URL を入力します。

```
http://hostname/ICSMonitor
```

ここで、*hostname* は、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express がインストールされているコンピューターの名前です。

6. Web Deployment にアクセスするには、次の URL を入力します。

```
http://hostname/WebDeployment
```

ここで、*hostname* は、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express がインストールされているコンピューターの名前です。

Web サーバー不使用時の Web ベース・ツールの構成

インストール環境で Web サーバーを使用していない場合は、異なるポート番号を使用するように Web ベース・ツールを構成する必要があります。以下の手順を実行します。

1. 以下のパラメーターを指定して、*ProductDir*¥bin¥CWDashboard.bat を実行します。
   - WebSphere Application Server Express または WebSphere Application Server のインストール・パス。例えば、
     C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥Express60¥AppServer
   - インストール先となるマシンの完全修飾ホスト名。例えば、hostname.ibm.com
   - WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール・ディレクトリー。例えば、C:¥IBM¥WebSphereServer
   - インストール済みの WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムで DB2 を使用している場合は、DB2 インストールの java ディレクトリーへのパスを指定します。例えば、C:¥Program Files¥IBM¥SQLLIB¥java のようになります。インストール済みの WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムで別のデータベースが使用されている場合は、このパラメーターに null 値を使用します。
   - n (HTTP サーバーの場合は no)
   - 新しいポート番号。例えば、7089
   - 新しい SSL ポート番号 (デフォルトは 7043)

   コマンド例を 2 つ示します。
   - データベースとして DB2 を使用する場合:

     ```
     C:¥IBM¥WebSphereServer¥bin¥CWDashboard.bat              /
     "C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥Express60¥AppServer"    /
     hostname.ibm.com "C:¥IBM¥WebSphereServer"               /
     "C:¥Program Files¥IBM¥SQLLIB¥java" n 7089 7043
     ```
   - データベースとして Microsoft SQL Server を使用する場合:

     ```
     C:¥IBM¥WebSphereServer¥bin¥CWDashboard.bat              /
     "C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥Express502¥AppServer"   /
     hostname.ibm.com "C:¥IBM¥WebSphereServer" null n 7089 7043
     ```

   重要: この手順中のいくつかのステップでは、1 つ以上の行でコマンドが改行され、その部分がスラッシュ (/) で示されています。これらの改行が挿入されたのは、ページ内にテキストが収まるようにするためです。実際にコマンドを入力する場合は、これらの箇所に改行ではなくスペースを挿入してください。
2. コマンド行から ICSMonitor Application Server を停止します。

   ```
   C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥Express60¥AppServer¥bin¥stopServer.bat  /
   ICSMonitor
   ```
3. 以下のようにコマンド行から ICSMonitor Application Server を始動します。

   ```
   C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥Express60¥AppServer¥bin¥startServer.bat  /
   ICSMonitor
   ```
4. System Monitor および Failed Event Manager にアクセスするには、次の URL を入力します。

   http://*hostname*:*portnumber*/ICSMonitor

   ここで、*hostname* は、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express がインストールされているコンピューターの名前です。

5. Web Deployment にアクセスするには、次の URL を入力します。

   http://*hostname*:*portnumber*/WebDeployment

   ここで、*hostname* は、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express がインストールされているコンピューターの名前です。

Tomcat を使用するための Web ベース・ツールの構成

このセクションでは、Web ベース・ツールを構成して、Tomcat を使用する方法について説明します。Tomcat ではなく、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を Web アプリケーション・サーバーとして使用する場合の手順については、53 ページの『WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を使用するための Web ベース・ツールの構成』を参照してください。先に進む前に、Tomcat バージョン 4.1.24 または 4.1.27 がシステムにインストールされていることを確認してください。

注: Tomcat 4.1.24 および 4.1.27 は、2 バイト文字セット (DBCS) の言語環境ではサポートされていません。

System Monitor および Failed Event Manager の構成による Tomcat の使用

System Monitor および Failed Event Manager を構成して Tomcat を使用するには、以下の手順に従います。

1. ICSMonitor ディレクトリーを *Tomcat_home*¥webapps ディレクトリーに作成します (*Tomcat_home* は、ご使用の環境における Tomcat のインストール先へのパスを表します)。
2. .war ファイルの内容を ICSMonitor ディレクトリーへ解凍します。

   注: WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストーラーを使用して製品をインストールした場合、CWDashboard.war ファイルは *ProductDir*¥WBSM ディレクトリーに置かれています。
3. 次の手順を実行して、*Tomcat_home*¥bin ディレクトリーにある setclasspath.bat ファイルを編集します。
   a. JAVA_OPTS プロパティーを以下のように設定します。

      ```
      -DDASHBOARD_URL=http://HostName[:PortNumber]/ICSMonitor
      -DDASHBOARD_HOME=Tomcat_home¥webapps¥ICSMonitor
      -DFEM_HOME=Tomcat_home¥webapps¥ICSMonitor
      -DORBNamingProvider=CosNaming
      -Dorg.omg.CORBA.ORBClass=com.ibm.CORBA.iiop.ORB
          -Dorg.omg.CORBA.ORBInitialPort=ORB_PORT
      -Dorg.omg.CORBA.ORBInitialHost=ORB_HOST
      -Dcom.ibm.CORBA.Debug.Output=stdout
      ```

      重要: 文字 -D で始まる行は、ページ内に収まるようにすべて別個の行として表示してあります。-D で始まる行の間は、改行ではなく、必ずスペースを挿入してください。

   b. InterChange Server Express リポジトリーに DB2 を使用している場合、setclasspath.bat 内のクラスパスに db2java.zip ファイルへのパスを追加

します。db2java.zip ファイルは、デフォルトでは *DB2_Installation_Dir*¥java ディレクトリーにあります。

注: ステップ 5b は、InterChange Server Express リポジトリーが DB2 上にある場合のみ必要です。

4. (オプション) *Tomcat_home*¥conf¥server.xml ファイルのポート番号を変更します。

   デフォルト・ポート番号は 8080 です。

重要: Tomcat は、*Tomcat_home*¥bin¥startup.bat をダブルクリックして起動する必要があります。デフォルトの「Tomcat の始動 (Start Tomcat)」ショートカットを使用して Tomcat を起動すると、System Monitor および Failed Event Manager は機能しません。これは、デフォルトのショートカットは *ProductDir*¥bin¥setclasspath.bat ファイルに設定されている環境変数を読み込まないためです。

Tomcat を使用するための Web Deployment の構成

Web Deployment を構成して Tomcat を使用するには、以下の手順に従います。

1. Web Deployment ディレクトリーを *Tomcat_home*¥webapps ディレクトリーに作成します (*Tomcat_home* は、ご使用の環境における Tomcat のインストール・パスを表します)。
2. .war ファイルの内容を WebDeployment ディレクトリーに解凍します。

   注: WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストーラーを使用して製品をインストールした場合、WebDeployment.war ファイルは *ProductDir*¥WBWD ディレクトリーに置かれています。
3. 次の手順を実行して、*Tomcat_home*¥bin ディレクトリーにある setclasspath.bat ファイルを編集します。
   a. JAVA_OPTS プロパティーを以下のように設定します。

      ```
      DWD_HOME=Tomcat_home¥webapps¥WebDeployment
      ```

   b. InterChange Server Express リポジトリーに DB2 を使用している場合、setclasspath.bat 内のクラスパスに db2java.zip ファイルへのパスを追加します。db2java.zip ファイルは、デフォルトでは *DB2_Installation_Dir*¥java ディレクトリーにあります。

   注: ステップ 5b は、リポジトリーが DB2 上にある場合のみ必要です。
4. (オプション) *Tomcat_home*¥conf¥server.xml ファイルのポート番号を変更します。

   デフォルト・ポート番号は 8080 です。

デフォルトでは、Web Deployment の Tomcat 4.1.24 バージョンのセキュリティー機能が使用可能になっています。管理者がアプリケーションへの全アクセス権限を得られるように、管理者の役割を持つユーザーを *Tomcat_home*¥conf¥server.xml フ

ファイル内で作成する必要があります。Web Deployment での役割の作成方法やセキュリティー機能の使用方法の詳細については、「*システム管理ガイド*」を参照してください。

重要: Tomcat は、*Tomcat_home*¥bin¥startup.bat をダブルクリックして起動する必要があります。デフォルトの「Tomcat の始動 (Start Tomcat)」ショートカットを使用して Tomcat を起動すると、Web Deployment は機能しません。これは、デフォルトのショートカットは *ProductDir*¥bin¥setclasspath.bat ファイルに設定されている環境変数を読み込まないためです。

Collaboration Enablement for Portal の構成

Collaboration Enablement for Portal は、WebSphere Portal Server で提供される Rational Application Developer (RAD) を使用します。

Launchpad およびインストーラーを実行する前に、サポートされているバージョンの WebSphere Portal Server がシステムにすでに存在していた場合、RAD のインストール環境はインストーラーによって自動的に構成されているため、このセクションで説明する構成タスクを実行する必要はありません。

WebSphere Business Integration Server Express のインストーラーの実行後に WebSphere Portal Server をインストールした場合は、次に示すように、RAD をツールで使用するために RAD を構成する必要があります。

1. WebSphere Business Integration Server Express 製品インストール・ディレクトリー内の tools¥IES301¥links ディレクトリーから、RAD インストール・ディレクトリー内の eclipse¥links ディレクトリーに com.ibm.btools.csm.link ファイルをコピーします。

   例えば、WebSphere Business Integration Server Express のインストール先が C:¥Programs¥IBM¥WebSphereBI で、RAD のインストール先が C:¥Programs¥IBM¥RAD¥SDP¥6.0 の場合、com.ibm.btools.csm.link ファイルを、C:¥Programs¥IBM¥WebSphereBI¥Tools¥IES301¥ から C:¥Programs¥IBM¥RAD¥SDP¥6.0¥eclipse¥links にコピーします。
2. WebSphere Business Integration Server Express 製品インストール・ディレクトリーの ¥bin ディレクトリー内にある startcsm_rad.bat ファイルに宣言されている WSWB_EXECUTABLE 変数と WSWB_PATH 変数を変更します。

   例えば、WebSphere Business Integration Server Express のインストール先が C:¥Programs¥IBM¥WebSphereBI で、RAD のインストール先が C:¥Programs¥IBM¥RAD¥SDP¥6.0 の場合、C:¥Programs¥IBM¥WebSphereBI¥bin ディレクトリーにある startcsm_rad ファイルを編集して、次の 2 行

   ```
   set WSWB_EXECUTABLE=%1
   set WSWB_PATH=%2
   ```

   を、次の 2 行に置き換えます。

   ```
   set WSWB_EXECUTABLE="C:¥Programs¥IBM¥RAD¥SDP¥6.0¥rationalsdp.exe"
   set WSWB_PATH="C:¥Programs¥IBM¥RAD¥SDP¥6.0"
   ```
3. 変更した

```
startcsm_rad.bat
```

ファイルを実行することにより、RAD を始動します。

Collaboration Enablement for Portal について詳しくは、「*WebSphere Business Integration Express システム・インプリメンテーション・ガイド*」を参照してください。

次のステップに進む

システムの前提条件ソフトウェアのインストール、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール、Web ベース・ツールの構成が正常に完了したら、35 ページの『第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの始動および管理』に記載されている WebSphere Business Integration Server Express システムまたは Express Plus システムの始動方法に関する説明に進んでください。

第 9 章 システムのアップグレード

この章では、既存の WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus インストールをアップグレードする場合の一般的な手順を説明します。この章は次のセクションから構成されます。

- 『サポートされるアップグレード・シナリオと前提事項』
- 62 ページの『既存のシステムの準備』
- 68 ページの『WebSphere Business Integration Server Express V4.4 から Express Plus V4.4 へのアップグレード』
- 72 ページの『WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 から Express V4.4 へのアップグレード』
- 76 ページの『WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から Express Plus V4.4 へのアップグレード』
- 85 ページの『新規のアップグレード・バージョンの始動』
- 85 ページの『アップグレードの検証』
- 86 ページの『アップグレード・バージョンのテスト』
- 86 ページの『アップグレード・バージョンのバックアップ』
- 86 ページの『次のステップに進む』

サポートされるアップグレード・シナリオと前提事項

以下のアップグレード・シナリオがサポートされています。

- WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.4 のインストールを Express Plus バージョン 4.4 にアップグレードする。
- WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.3.1 のインストールを Express バージョン 4.4 にアップグレードする。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus バージョン 4.3.1 のインストールを Express Plus バージョン 4.4 にアップグレードする。このシナリオには、以下のアップグレードを実行するための指示も含まれています。
  - Adapter Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus バージョン 4.3.1 をバージョン 4.4 にアップグレードする。
  - Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus バージョン 4.3.1 をバージョン 4.4 にアップグレードする。

以下のアップグレード・シナリオはサポートされていません。

- WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.3.1 のインストールを Express Plus バージョン 4.4 にアップグレードする。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus バージョン 4.3.1 のインストールを Express バージョン 4.4 にアップグレードする。

アップグレード手順では、すでにインストール済みのコンポーネントはアップグレード用に事前選択され、選択解除することはできません。まだインストールしてい

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

ない追加コンポーネントは、アップグレード処理中に選択できます。すべてのアップグレード手順では、以下の条件を前提としています。

- アップグレードを開発環境で実行し、システム・テスト完了後にアップグレード済みソフトウェアを実稼働環境に移行する予定である。
- 該当するすべてのソフトウェアが使用可能である。必須ソフトウェアのリストについては、 `http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress` を参照してください。
- アップグレード手順は、InterChange Server Express コンポーネントに対して実行するとともに、別々のマシンに存在する場合はさまざまなマシンでインストーラーを実行して、Toolset Express、アダプター、およびサンプル・コンポーネントに対しても実行する。

注: この章で WBI SE バージョン 4.3.1 へのアップグレードのことを指しているすべての参照資料は、WBI SE バージョン 4.3.1.1 へのアップグレードにも適用されます。

既存のシステムの準備

システムをアップグレードするには、その前に次の手順を実行する必要があります。

- 『既存のユーザー・プロジェクトの保存』
- 64 ページの『前提条件ソフトウェアのアップグレード』
- 66 ページの『システムを静止状態にする』
- 67 ページの『システムのバックアップ』
- 68 ページの『システムのシャットダウン』

既存のユーザー・プロジェクトの保存

既存の WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムで定義されたすべてのユーザー・プロジェクトは、ツールとともにローカル・マシンに格納されます。インストーラーを実行して別のバージョンの WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus にアップグレードすると、新規にアップグレードされたツールは、既存のユーザー・プロジェクトが存在する System Manager ワークスペースへのパスを自動的に認識しません。

アップグレード済みのシステムで既存のユーザー・プロジェクトを使用できるようにするには、次のいずれかを実行します。

- 既存のユーザー・プロジェクトをアップグレードの前にソリューションとして一時的な場所にエクスポートし、アップグレード後に新規のインストール環境にインポートすることにより、既存のユーザー・プロジェクトをマイグレーションする。これが推奨の方法です。
- アップグレード後、System Manager のワークスペース・パスを変更し、元のユーザー・プロジェクトが存在する元のワークスペースの場所を指すようにする。

既存のプロジェクトのマイグレーション

既存のプロジェクトをマイグレーションするには、まずプロジェクトをソリューションとして一時的な場所にエクスポートし、その後、新規にアップグレードされた System Manager にインポートして戻します。

ユーザー・プロジェクト・ソリューションのエクスポート: ユーザー・プロジェクトと、ユーザー・プロジェクトがソリューションとして参照する統合コンポーネントをエクスポートするには、以下の手順を実行します。

注: ソリューションをエクスポートすると、そのソリューションに選択するユーザー・プロジェクトに含まれている統合コンポーネントとショートカットのみがマイグレーションされます。ユーザー・プロジェクトにショートカットとして含まれていない追加の統合コンポーネントもマイグレーションしたい場合は、System Manager を使用してコンポーネントをパッケージにエクスポートする手順 (「*システム・インプリメンテーション・ガイド*」に記載) も実行してください。

1. 「WebSphere Business Integration System Manager」ビューで、「**ユーザー・プロジェクト**」フォルダーを展開して「**InterChange Server プロジェクト**」フォルダーを右クリックし、コンテキスト・メニューから「**ソリューションをエクスポート**」を選択します。System Manager により、「ソリューションのエクスポート・ウィザード」が表示されます。
2. エクスポートするコンポーネントを選択するには、以下のオプションのいずれかを実行します。
   - ユーザー・プロジェクトの横にあるチェック・ボックスを有効にして、プロジェクト内のすべてのコンポーネントを選択します。
   - コンポーネント・グループの横にあるチェック・ボックスを有効にして、グループ内のすべてのコンポーネントを選択します。
   - コンポーネント・グループを強調表示し、右側のペインの個々のコンポーネントの横にあるチェック・ボックスを有効にして、これらのコンポーネントを選択します。
3. ソリューションのエクスポート先ディレクトリーの絶対パスと名前を、ウィザード画面の下部にあるテキスト・フィールドに入力するか、または「**参照**」をクリックして、目的のディレクトリーへ移動します。
4. 「**完了**」をクリックします。System Manager により、以下の処理が実行され、ステップ 3 で指定したディレクトリーにソリューションがをエクスポートされます。
   a. ショートカットが格納されている「ユーザー」ディレクトリーが、ソリューションのエクスポート時に選択されたユーザー・プロジェクトに作成されます。
   b. ショートカットによって参照されている統合コンポーネント・ライブラリーのディレクトリーが格納されている「システム」ディレクトリーが、ソリューションのエクスポート時に選択されたユーザー・プロジェクトに作成されます。
5. エクスポート操作が正常に完了したことを示すプロンプトが表示されたら、「**OK**」 をクリックします。

ユーザー・プロジェクト・ソリューションのインポート: InterChange Server Express を動作させた状態で、System Manager を InterChange Server Express インスタンスに接続し、以下の手順を実行します。

1. 「ユーザー・プロジェクト」フォルダーを展開し、「**InterChange Server プロジェクト**」を右クリックして、「**ソリューションのインポート**」を選択します。
2. エクスポートされたソリューションが存在するディレクトリーの絶対パスと名前を、「ソリューション・ディレクトリー名」フィールドに入力するか、または「**参照**」をクリックして、目的のディレクトリーへ移動します。
3. 「**完了**」をクリックします。System Manager により、統合コンポーネント・ライブラリーと、エクスポートされたソリューション内で定義されたユーザー・プロジェクトが、使用している環境に作成されます。

前提条件ソフトウェアのアップグレード

Launchpad インストール・インターフェースは、いくつかの前提条件ソフトウェアを自動的にアップグレードします。ただし、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の現行バージョンによるアップグレードがサポートされている前提条件ソフトウェアより前のバージョンの前提条件ソフトウェアがある場合は、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をアップグレードする前に、前提条件ソフトウェアを手動でアップグレードする必要があります。(サポートされているバージョンの前提条件ソフトウェアについては、`http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress` を参照してください。) 前提条件ソフトウェアは、何らかの他の理由がある場合、手動でアップグレードすることもできます。前提条件ソフトウェアを、現行リリース (WebSphere Business Integration Server Express 4.4) でサポートされているバージョンに手動でアップグレードすると、残りのアップグレードを実行するときに、Launchpad により、現行バージョンの前提条件ソフトウェアがあると検出されます。特定の前提条件ソフトウェアを手動でアップグレードする場合は、そのソフトウェアに用意されているアップグレード手順に従ってください。

以下のセクションでは、いくつかの前提条件ソフトウェアのアップグレード・シナリオや、任意のデータベースを対象に実行が必要な手順について説明します。ソフトウェアをアンインストールするかアップグレードする前に、67 ページの『システムのバックアップ』に記載されている手順に従うようにしてください。

データベースのマイグレーション・オプション

WebSphere Business Integration Express システムのアップグレードを準備する場合、データベースをマイグレーションするためのオプションとして、インプレース・データベース・マイグレーションと非インプレース・データベース・マイグレーションの 2 つがあります。インプレース・データベース・マイグレーションとは、古いリポジトリーを再利用し、WebSphere Business Integration Express サーバーの最初の始動時に、WebSphere Business Integration Express によってリポジトリーのアップグレードを実行するという意味です。非インプレース・データベース・マイグレーションとは、新規で空のリポジトリー・データベースを使用したアップグレードという意味です。インプレース・データベース・マイグレーションについては、67 ページの『システムのバックアップ』に記載の特殊な手順に従うようにしてください。

IBM DB2 Universal Database

以下のセクションは、IBM DB2 に適用されます。

以前の DB2 バージョンの場合: 以前のバージョンの DB2 をアンインストールして、いずれのバージョンの DB2 も存在しない状態にすると、Launchpad により、DB2 バージョン 8.2 Express をインストールするよう求められます。

必要なバージョン (8.1.5) より前のバージョンの DB2 がある場合は、Launchpad により、DB2 バージョン 8.2 Express をインストールするよう求められます。

DB2 バージョン 8.1.5 以上をインストールしてある場合は、DB2 の新しいバージョンのインストールを Launchpad から要求されることはありません。この場合、8.2 より前のバージョンの DB2 を使用しており、バージョン 8.2 の DB2 にアップグレードするには、手動でアップグレードする必要があります。

注: サポートされているバージョンの DB2 (8.15 以上) がすでにインストールされている場合は、67 ページの『システムのバックアップ』に説明されている「インプレース」マイグレーションの手順に従ってください。

以前のユーザー・ログインの移管: 以前サポートされていた DB2 のバージョン (8.1.2 Express - 8.1.4 Express) からのアップグレードを Launchpad を使用して行う場合は、旧バージョンの DB2 で WebSphere Business Integration Express に使用されていたのと同じユーザー名およびパスワードを、インストールされる新バージョンの DB2 でも使用する必要があります。WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus バージョン 4.3.1 でサポートされているユーザー名とパスワードは、`smbadmin` (ユーザー名) と `smbP4$$word` (パスワード) であるため、この DB2 インスタンスが WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus バージョン 4.3.1 で使用された場合、ユーザー名/パスワードは、この組み合わせになっている必要があります。

このためには、以下の手順を実行します。

1. すべての DB2 サービスを停止します。
2. ユーザー名 `smbadmin` とパスワード `smbP4$$word` を Windows の「管理者」グループに追加します。
3. アップグレードの手順中、Launchpad により、データベースのユーザー名とパスワードの入力が求められます。前述のように、同じユーザー名/パスワードを使用します。

Microsoft SQL Server

Microsoft SQL Server 2000 をデータベースとして使用している場合は、Microsoft SQL Server のアップグレード手順に従って、手動でアップグレードする必要があります。Launchpad は、この製品を自動的にはアップグレードしません。

IBM WebSphere Application Server

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus バージョン 4.4 では、WebSphere Application Server Express バージョン 5.1.1 以上をサポートします。バージョン 6.0 は、Launchpad がインストールしたバージョンです。5.1.1 より前のバージョンの WebSphere Application Server は、すべてアンインストールして

ください。すでに 5.1.1 があり、6.0 にアップグレードする場合は、Launchpad によってアップグレードが要求されることはないため、手動でアップグレードする必要があります。

注: 以前のバージョンの WebSphere Application Server Express (WebSphere Application Server Express 5.1 や 5.1.1 など) 上に Launchpad を使用して WAS 6.0 Express をインストールすると、WAS のインストール環境がマシン上に 2 つ共存するようになることがあります。この場合、LaunchPad は、Web ベース・ツールを WAS 6.0 Express インストール環境に配置します。

IBM WebSphere MQ Server および Client

以前のバージョンの WebSphere Business Integration Express によってサポートされている IBM WebSphere MQ の旧バージョンがインストールされている場合は、Launchpad により、サポートされるバージョンに自動的にアップグレードされます。例えば、MQ 5.3 CSD 05 がインストールされている場合は、Launchpad により、CSD 07 に自動的にアップグレードされます。

IBM Java Development Kit

Launchpad により、適切なバージョンの IBM JDK (バージョン 1.4.2) がインストールされます。前のバージョンを削除する必要はありません。

システムを静止状態にする

システムをアップグレードするには、その前にシステムが静止状態であることを確認する必要があります。つまり、環境をバックアップしてアップグレード手順を実行する前に、進行中のイベントをすべて完了し、未確定のトランザクションをすべて解決します。

以下の手順では、システムを静止状態にする方法について説明します。

1. 失敗したイベントを再サブミットするか、そのイベントを破棄します (このステップはオプションです)。
2. すべてのコネクターについてイベント表のポーリングを停止するため、コネクターの `PollFrequency` プロパティーを「`No`」に設定して、コネクターを再始動します。
3. 進行中のイベントを含め、システムですべてのイベントを実行します。必ず未確定トランザクションをすべて解決してください。
4. キューから以前のイベントをすべて除去することにより、キューをクリアします。

   注: ステップ 4 は、失敗したイベントを処理せずにアプリケーションから再サブミットする場合のみ行ってください。それ以外の場合、キューは空になっているはずですが、念のため再確認してください。
5. すべての Windows プログラムをシャットダウンし、InterChange Server Express に関連するすべてのプロセスを停止します。

実行中のシステムを正常に停止する方法については、「*システム管理ガイド*」を参照してください。

システムのバックアップ

システムのバックアップを作成すると、新規バージョンのインストール時に不注意でファイルを上書きしても、そのファイルを回復できます。アップグレード手順を実行する前に、静的データと動的データ (アップグレードにかかわらず定期的にバックアップされる変更可能データ) の両方のバックアップを作成します。静的データおよび動的データの例については、 68 ページの表 3 を参照してください。

システムのバックアップを作成するには、以下の手順を行います。

- repos_copy ユーティリティーを使用して、現在の ICS Express リポジトリーをバックアップします。例えば、InterChange Server Express のインスタンスには WICSEX という名前が付いており、デフォルトのログイン ID「admin」とデフォルトのパスワード「null」があるものとします。次の repos_copy コマンドを実行すると、RepositoryExpress.txt というファイルにバックアップ・リポジトリー・オブジェクトが作成されます。

  ```
  repos_copy -sWICSEX -oRepositoryExpress.txt -uadmin -pnull
  ```

- 製品ディレクトリーをバックアップします。このバックアップに組み込まれる重要な項目は、次のようなすべてのカスタマイズ項目です。
  - カスタムの .jar ファイル (カスタム・データ・ハンドラーなど) および Java パッケージ。これらは、通常、製品ディレクトリーの lib サブディレクトリーにあります。
  - すべての始動スクリプト。
  - 次のディレクトリーにある WebSphere MQ の構成ファイル。

    ProductDir¥mqseries¥crossworlds_mq.tst

  IBM では、InterChange Server Express 製品ディレクトリー全体 のシステム・バックアップをとることをお勧めします。
- システム管理者に依頼して、ファイル構造のバックアップを作成します。環境設定およびその他のファイルをコピーする必要があります。
- システム管理者に依頼して、IBM WebSphere MQ のバックアップを作成します。
- データベース管理者 (DBA) に依頼して、データベースのバックアップを作成します。
  - これは、スキーマ情報、ストアード・プロシージャーを含む完全なバックアップでなければなりません。ICS Express リポジトリー・データベースだけでなく、その他のデータベースも使用するためにシステムを構成した場合は、その他のデータベースのバックアップも同様に作成します。
  - ICS リポジトリーが格納されているデータベースから、リポジトリー表をドロップします。必ずリポジトリーをバックアップしてから これらのリポジトリー表をドロップするようにしてください。

    注: インプレース・データベース・マイグレーションの場合: リポジトリー表は削除しない でください。データベース・ソフトウェアのバックアップとアップグレードを実行する方法の説明については、データベース・サーバーの資料を参照してください。

  このステップを実行するには、適切なデータベース・ユーティリティーを使用します。例えば、DB2 にはエクスポート・ユーティリティーが用意されています。手順については、データベース・サーバーの資料を参照してください。

表 3 に、各コンポーネントのバックアップ方法の概要を示します。

表 3. データのバックアップ方法

データのタイプ	バックアップ方法
静的データ	
リポジトリー	`repos_copy` ユーティリティーを使用し、カスタマイズしたシステム・コンポーネントの一部またはすべてを保管します。詳しくは、「*システム管理ガイド*」のコンポーネントのバックアップ方法の説明を参照してください。
カスタムのマップ Java クラス・ファイル (`.class`)	これらのファイルをシステム・バックアップに組み込むため、システム・バックアップに以下のディレクトリーがあることを確認してください。 *ProductDir*¥DLMs
カスタム・コネクター	システム・バックアップにディレクトリー *ProductDir*¥connectors¥*connector_name* を含めます。ここで、「*connector_name*」はカスタム・コネクターの名前です。
カスタマイズされた始動スクリプト	始動スクリプトをカスタマイズしてある場合は、これらがシステム・バックアップに組み込まれていることを確認してください。
ICS Express 構成ファイル (`InterchangeSystem.cfg`)	*ProductDir* ディレクトリーにある ICS Express 構成ファイルをシステム・バックアップに組み込みます。
動的データ	
相互参照表、失敗したイベントの表、および関係表	データベースにはデータベース・バックアップ・ユーティリティーを使用します。詳しくは、「*システム管理ガイド*」のシステム・コンポーネントのバックアップ方法の説明を参照してください。
コネクター・イベント・アーカイブ表	これらの表を含むデータベースには、データベース・バックアップ・ユーティリティーを使用します。
ログ・ファイル	以下のディレクトリーをシステム・バックアップに組み込みます。 *ProductDir*¥log

システムのシャットダウン

バックアップが完了したら、次の手順でシステムをシャットダウンできます。

1. InterChange Server Express とその関連コンポーネントをシャットダウンします。
2. データベース・サーバーをシャットダウンします。
3. WebSphere MQ をシャットダウンします。

システムのシャットダウンの詳細については、「*システム管理ガイド*」を参照してください。

WebSphere Business Integration Server Express V4.4 から Express Plus V4.4 へのアップグレード

システムを静止状態にしてバックアップを作成したら、アップグレード手順を安全に開始できます。Launchpad から、WebSphere Business Integration Server Express V4.4 から Express Plus V4.4 へのアップグレードをガイドする GUI インストーラーを起動することができます。GUI インストーラーの処理内容は次のとおりです。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品のコンポーネントをインストールし、サービスとして構成します。
- 選択した新規アダプターすべてをインストールし、サービスとして構成します。
- 既存のデータベースを削除しません。
- 既存のリポジトリーを保存しますが、再配置はしません。

Launchpad を呼び出して GUI インストーラーを起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の左側の列にある「**製品のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

   「製品のアップグレード」画面が表示されます。
2. 「製品のアップグレード」画面で、「**次へ**」をクリックします。

   「サーバーのインストール」画面が表示されます。
3. 「サーバーのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。
   - バージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントをインストール済みの場合は、「**InterChange Server Express**」という項目の横にあるチェック・ボックスが選択され、使用不可になっています。「**次へ**」を選択します。
   - バージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントをインストールしていない 場合は、「**InterChange Server Express**」という項目の横にあるチェック・ボックスが選択され、使用可能になっています。次の 2 つのうち、いずれか一方の方法を選択して次に進むことができます。
     - 前述の項目を選択した状態で維持し、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントをインストールする。
     - チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントがインストールされていない状態を維持する。

   「**次へ**」を選択します。

   「ツールのインストール」画面が表示されます。
4. 「ツールのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。
   - バージョン 4.4 の Toolset Express 管理ツールと開発ツールがインストールされている場合は、「**管理ツール**」項目と「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスが選択されて使用不可になっています。「**次へ**」を選択します。
   - バージョン 4.4 の Toolset Express 管理ツールのみがインストールされている場合、「**管理ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスは選択されて使用不可になり、「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスが選択されて使用可能になっています。次の 2 つのうち、いずれか一方の方法を選択して次に進むことができます。
     - 「**開発ツール**」項目を選択された状態のままにし、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 の開発ツールをインストールする。

– チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の開発ツールがインストールされないようにする。

「**次へ**」を選択します。

注: 開発ツールのみをインストールすることはできません。開発ツールをインストールするには、管理ツールもインストールする必要があります。

- バージョン 4.4 の Toolset Express 管理ツールと開発ツールがインストールされていない 場合は、「**管理ツール**」項目と「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスは選択されて使用可能になっています。次の 3 つのうち、いずれか一方の方法を選択して次に進むことができます。
  – 両方のチェック・ボックスが選択された状態のままにし、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 の管理ツールと開発ツールをインストールする。
  – 「**管理ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスを選択された状態のままにし、「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の管理ツールのみをインストールする。

    注: 開発ツールのみをインストールすることはできません。開発ツールをインストールするには、管理ツールもインストールする必要があります。

  – 両方のチェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の管理ツールと開発ツールがどちらもインストールされないようにする。

    ヒント: 最初に「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスを選択解除します。これにより、「**管理ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスが使用可能になり、チェック・ボックスを選択解除できるようになります。

  「**次へ**」を選択します。

「アダプターのインストール」画面が表示されます。

5. バージョン 4.4 のアダプターをインストール済みの場合は、「アダプターのインストール」画面の各インストール済みアダプターの横にあるチェック・ボックスは選択され、使用不可の状態になっています。さらに、Adapter for JText をまだインストールしていない場合、このアダプターは System Test サンプルを実行するときに必要であるため、このアダプターはデフォルトで選択されています。(System Test サンプルは、ステップ 6 (71 ページ) で説明した、「サンプルのインストール」画面から選択できるサンプル・コンポーネントの一部です。) 以下のいずれかを実行します。
   - すでにインストールされているアダプター以外にはアダプターをインストールしない場合は、「Adapter for JText」の横にあるチェック・ボックスを選択解除 (解除が必要な場合) して、「**次へ**」を選択します。
   - すでにインストールされているアダプター以外にインストールするアダプターを Adapter for JText のみにする場合は、「Adapter for JText」の横にあるチェック・ボックスを選択した状態のまま、「**次へ**」を選択します。
   - Adapter for JText およびインストール済みのアダプターに加えてその他のアダプターをインストールする場合は、「Adapter for JText」の横にあるチェッ

ク・ボックスを選択した状態のまま、追加する他のアダプターの横にあるチェック・ボックスを選択して、「**次へ**」を選択します。

「サンプルのインストール」画面が表示されます。

6. 「サンプルのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。
   - バージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントをインストール済みの場合は、「**サンプル**」という項目の横にあるチェック・ボックスが選択され、使用不可になっています。「**次へ**」を選択します。
   - バージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントをインストールしていない 場合は、「**サンプル**」という項目の横にあるチェック・ボックスが選択され、使用可能になっています。次の 2 つのうち、いずれか一方の方法を選択して次に進むことができます。
     - 前述の項目を選択した状態で維持し、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントをインストールする。
     - チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントがインストールされていない状態を維持する。

   「**次へ**」を選択します。

   注: サンプル・コンポーネントをインストールするには、InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter のインストールが必要です。そのため、サンプル・コンポーネントのインストールを選択すると、InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter は、ユーザーが前の画面でこれらのインストールを選択したかどうかにかかわらず、インストールされます。

   「ソフトウェア前提条件」画面が表示されます。

7. 「ソフトウェア前提条件」画面では、インストーラーによって必要な前提条件が通知されます。以下のいずれかを実行します。
   - 「ソフトウェア前提条件」画面に、追加の前提条件が必要ないと表示された場合は、ステップ 8 に進みます。
   - 「ソフトウェア前提条件」画面に、追加の前提条件ソフトウェアが必要であると表示された場合、前提条件ソフトウェアのインストール方法の説明については、ステップ 3 (13 ページ) を、追加の前提条件ソフトウェア情報については、 22 ページの『ソフトウェア前提条件』のセクションを参照してください。
8. 「ソフトウェア前提条件」の下部にある「**製品のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

   「ソフトウェア・ライセンス情報」画面が表示されます。

9. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**使用条件の条項に同意します**」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「**次へ**」を選択します。

   次のいずれかの処理が実行されます。
   - InterChange Server Express コンポーネントがすでにインストールされており、アップグレードされる予定であるか、またはアップグレード時に

InterChange Server Express コンポーネントをインストールする場合、インストーラーは、適切な前提条件ソフトウェアが存在し、正常に構成されていることを検査します。このサーバー・マシンで使用できる物理的なプロセッサーの最大数は、2 つに制限されます。詳細については、製品のライセンス条件を参照してください。

– 前提条件が満たされていない場合は、エラー・メッセージが表示され、インストールは強制的に取り消されます。
– 前提条件が満たされた場合は、製品のインストールが開始します。この場合、ステップ 11 から手順を続行します。

- InterChange Server Express コンポーネントがインストールされておらず、アップグレード時にはインストールされない予定の場合は、「ネーム・サーバー構成」画面が表示されます。この場合、ステップ 10 から手順を続行します。

10. 「ネーム・サーバー構成」画面で、InterChange Server Express コンポーネントをインストールした (またはインストールする予定の) コンピューターの IP アドレスを入力して、「**次へ**」を選択します。これにより、インストール・プロセスが開始します。ネーム・サーバーの詳細については、21 ページの『「カスタム」インストールの追加情報』を参照してください。
11. インストール・プロセスが開始すると、インストーラーは、インストール用に十分なディスク・スペースがあるかどうかを検査します。
    - 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「**次へ**」ボタンが使用不可になります。この場合は、「**戻る**」を選択していくつかの機能またはサブ機能を選択解除するか、指定したドライブの不要なスペースを削除します。
    - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。多数の通知画面が表示されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストールの要約 (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。「**完了**」を選択して、GUI を終了します。

WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 から Express V4.4 へのアップグレード

システムを静止状態にしてバックアップを作成したら、アップグレード手順を安全に開始できます。Launchpad から、WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 から WebSphere Business Integration Server Express V4.4 へのアップグレードをガイドする GUI インストーラーを起動することができます。GUI インストーラーの処理内容は次のとおりです。

- WebSphere Business Integration Server Express V4.4 製品のコンポーネントをインストールし、サービスとして構成します。
- 選択した新規アダプターすべてをインストールし、サービスとして構成します。
- 既存のデータベースを削除しません。
- 既存のリポジトリーを保存しますが、再配置はしません。

- Failed Event Manager 用に以前にセットアップした役割ベースのアクセス・セキュリティー役割は保存されません (「システム・インプリメンテーション・ガイド」の説明に従って、役割ベースのアクセス・セキュリティー役割を新規に作成できます)。

Launchpad を呼び出して GUI インストーラーを起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の左側の列にある「**製品のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

   「製品のアップグレード」画面が表示されます。
2. 「製品のアップグレード」画面で、「**次へ**」をクリックします。

   「サーバーのインストール」画面が表示されます。
3. 「サーバーのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。
   - バージョン 4.3.1 の InterChange Server Express コンポーネントをインストール済みの場合は、「**InterChange Server Express**」という項目の横にあるチェック・ボックスが選択され、使用不可になっています。「**次へ**」を選択します。
   - バージョン 4.3.1 の InterChange Server Express コンポーネントをインストールしていない 場合は、「**InterChange Server Express**」という項目の横にあるチェック・ボックスが選択され、使用可能になっています。次の 2 つのうち、いずれか一方の方法を選択して次に進むことができます。
     - 前述の項目を選択した状態で維持し、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントをインストールする。
     - チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントがインストールされていない状態を維持する。

     「**次へ**」を選択します。

   「ツールのインストール」画面が表示されます。
4. 「ツールのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。
   - バージョン 4.3.1 の Toolset Express 管理ツールと開発ツールがインストールされている場合は、「**管理ツール**」項目と「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスが選択されて使用不可になっています。「**次へ**」を選択します。
   - バージョン 4.3.1 の Toolset Express 管理ツールのみがインストールされている場合、「**管理ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスは選択されて使用不可になり、「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスは選択されて使用可能になっています。次の 2 つのうち、いずれか一方の方法を選択して次に進むことができます。
     - 「**開発ツール**」項目を選択された状態のままにし、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 の開発ツールをインストールする。

– チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の開発ツールがインストールされないようにする。

「**次へ**」を選択します。

注: 開発ツールのみをインストールすることはできません。開発ツールをインストールするには、管理ツールもインストールする必要があります。

- バージョン 4.3.1 の Toolset Express 管理ツールと開発ツールがインストールされていない 場合は、「**管理ツール**」項目と「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスが選択されて使用可能になっています。次の 3 つのうち、いずれか一方の方法を選択して次に進むことができます。
  – 両方のチェック・ボックスが選択された状態のままにし、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.3.1 の管理ツールと開発ツールをインストールする。
  – 「**管理ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスを選択された状態のままにし、「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の管理ツールのみをインストールする。

    注: 開発ツールのみをインストールすることはできません。開発ツールをインストールするには、管理ツールもインストールする必要があります。

  – 両方のチェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の管理ツールと開発ツールがどちらもインストールされないようにする。

    ヒント: 最初に「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスを選択解除します。これにより、「**管理ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスが使用可能になり、チェック・ボックスを選択解除できるようになります。

「**次へ**」を選択します。

「アダプターのインストール」画面が表示されます。

5. 「アダプターのインストール」画面で、バージョン 4.3.1 のアダプターをインストール済みの場合は、各インストール済みアダプターの横にあるチェック・ボックスが選択され、使用不可の状態になっています。さらに、Adapter for JText をまだインストールしていない場合、このアダプターは System Test サンプルを実行するときに必要であるため、このアダプターはデフォルトで選択されています。(System Test サンプルは、ステップ 6 (75 ページ) で説明した、「サンプルのインストール」画面から選択できるサンプル・コンポーネントの一部です。) 以下のいずれかを実行します。
   - すでにインストールされているアダプター以外にはアダプターをインストールしない場合は、「Adapter for JText」の横にあるチェック・ボックスを選択解除 (解除が必要な場合) して、「**次へ**」を選択します。
   - すでにインストールされているアダプター以外にインストールするアダプターを Adapter for JText のみにする場合は、「Adapter for JText」の横にあるチェック・ボックスを選択した状態のまま、「**次へ**」を選択します。
   - Adapter for JText およびインストール済みのアダプターに加えてその他のアダプターをインストールする場合は、「Adapter for JText」の横にあるチェッ

ク・ボックスを選択した状態のまま、追加する他のアダプターの横にあるチェック・ボックスを選択して、「**次へ**」を選択します。

「サンプルのインストール」画面が表示されます。

6. 「サンプルのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。
   - バージョン 4.3.1 のサンプル・コンポーネントをインストール済みの場合は、「**サンプル**」という項目の横にあるチェック・ボックスが選択され、使用不可になっています。「**次へ**」を選択します。
   - バージョン 4.3.1 のサンプル・コンポーネントをインストールしていない 場合は、「**サンプル**」という項目の横にあるチェック・ボックスが選択され、使用可能になっています。次の 2 つのうち、いずれか一方の方法を選択して次に進むことができます。
     - 前述の項目を選択した状態で維持し、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントをインストールする。
     - チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントがインストールされていない状態を維持する。

   「**次へ**」を選択します。

   注: サンプル・コンポーネントをインストールするには、InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter のインストールが必要です。そのため、サンプル・コンポーネントのインストールを選択すると、InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter は、ユーザーが前の画面でこれらのインストールを選択したかどうかにかかわらず、インストールされます。

   「ソフトウェア前提条件」画面が表示されます。

7. 「ソフトウェア前提条件」画面では、インストーラーによって必要な前提条件が通知されます。以下のいずれかを実行します。
   - 「ソフトウェア前提条件」画面に、追加の前提条件が必要ないと表示された場合は、ステップ 8 に進みます。
   - 「ソフトウェア前提条件」画面に、追加の前提条件ソフトウェアが必要であると表示された場合、前提条件ソフトウェアのインストール方法の説明については、ステップ 3 (13 ページ) を、追加の前提条件ソフトウェア情報については、 22 ページの『ソフトウェア前提条件』を参照してください。
8. 「ソフトウェア前提条件」の下部にある「**製品のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

   「ソフトウェア・ライセンス情報」画面が表示されます。

9. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**使用条件の条項に同意します**」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「**次へ**」を選択します。

   「アップグレード検査 (upgrade check)」画面が表示されます。

10. 「アップグレード検査 (upgrade check)」画面で、「**次へ**」を選択します。

    次のいずれかの処理が実行されます。

- InterChange Server Express コンポーネントがすでにインストールされており、アップグレードされる予定であるか、またはアップグレード時に InterChange Server Express コンポーネントをインストールする場合、インストーラーは、適切な前提条件ソフトウェアが存在し、正常に構成されていることを検査します。このサーバー・マシンで使用できる物理的なプロセッサーの最大数は、2 つに制限されます。詳細については、製品のライセンス条件を参照してください。
  - 前提条件が満たされていない場合は、エラー・メッセージが表示され、インストールは強制的に取り消されます。
  - 前提条件が満たされた場合は、製品のインストールが開始します。この場合、ステップ 12 から手順を続行します。
- InterChange Server Express コンポーネントがインストールされておらず、アップグレード時にはインストールされない予定の場合は、「ネーム・サーバー構成」画面が表示されます。この場合、ステップ 11 から手順を続行します。

11. 「ネーム・サーバー構成」画面で、InterChange Server Express コンポーネントをインストールした (またはインストールする予定の) コンピューターの IP アドレスを入力して、「**次へ**」を選択します。これにより、インストール・プロセスが開始します。ネーム・サーバーの詳細については、21 ページの『「カスタム」インストールの追加情報』を参照してください。
12. インストール・プロセスが開始すると、インストーラーは、インストール用に十分なディスク・スペースがあるかどうかを検査します。
    - 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「**次へ**」ボタンが使用不可になります。この場合は、「**戻る**」を選択していくつかの機能またはサブ機能を選択解除するか、指定したドライブの不要なスペースを削除します。
    - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。多数の通知画面が表示されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストールの要約 (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。「**完了**」を選択して、GUI を終了します。

WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から Express Plus V4.4 へのアップグレード

システムを静止状態にしてバックアップを作成したら、アップグレード手順を安全に開始できます。Launchpad から、WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.4 へのアップグレードをガイドする GUI インストーラーを起動することができます。GUI インストーラーの処理内容は次のとおりです。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.4 製品のコンポーネントをインストールし、サービスとして構成します。
- 選択した新規アダプターすべてをインストールし、サービスとして構成します。
- 既存のデータベースを削除しません。
- 既存のリポジトリーを保存しますが、再配置はしません。

- Failed Event Manager 用に以前にセットアップした役割ベースのアクセス・セキュリティー役割は保存されません (「システム・インプリメンテーション・ガイド」の説明に従って、役割ベースのアクセス・セキュリティー役割を新規に作成できます)。

注: バージョン 4.3.1 の Adapter または Collaboration Capacity Packs for WebSphere Business Integration Server Express Plus がインストールされている場合は、WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品をアップグレードした後 で、これらの製品もバージョン 4.4 にアップグレードする必要があります。詳しくは、81 ページの『Adapter Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から V4.4 へのアップグレード』および 83 ページの『Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から V4.4 へのアップグレード』のセクションを参照してください。

Launchpad を呼び出して GUI インストーラーを起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の左側の列にある「**製品のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

   「製品のアップグレード」画面が表示されます。
2. 「製品のアップグレード」画面で、「**次へ**」をクリックします。

   「サーバーのインストール」画面が表示されます。
3. 「サーバーのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。
   - バージョン 4.3.1 の InterChange Server Express コンポーネントをインストール済みの場合は、「**InterChange Server Express**」という項目の横にあるチェック・ボックスが選択され、使用不可になっています。「**次へ**」を選択します。
   - バージョン 4.3.1 の InterChange Server Express コンポーネントをインストールしていない 場合は、「**InterChange Server Express**」という項目の横にあるチェック・ボックスが選択され、使用可能になっています。次の 2 つのうち、いずれか一方の方法を選択して次に進むことができます。
     - 前述の項目を選択した状態で維持し、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントをインストールする。
     - チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントがインストールされていない状態を維持する。

   「**次へ**」を選択します。

   「ツールのインストール」画面が表示されます。
4. 「ツールのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。
   - バージョン 4.3.1 の Toolset Express 管理ツールと開発ツールがインストールされている場合は、「**管理ツール**」項目と「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスが選択されて使用不可になっています。「**次へ**」を選択します。

- バージョン 4.3.1 の Toolset Express 管理ツールのみがインストールされている場合、「**管理ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスは選択されて使用不可になり、「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスは選択されて使用可能になっています。次の 2 つのうち、いずれか一方の方法を選択して次に進むことができます。
  - 「**開発ツール**」項目を選択された状態のままにし、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.3.1 の開発ツールをインストールする。
  - チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の開発ツールがインストールされないようにする。

  「**次へ**」を選択します。

  注: 開発ツールのみをインストールすることはできません。開発ツールをインストールするには、管理ツールもインストールする必要があります。
- バージョン 4.3.1 の Toolset Express 管理ツールと開発ツールがインストールされていない 場合は、「**管理ツール**」項目と「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスが選択されて使用可能になっています。次の 3 つのうち、いずれか一方の方法を選択して次に進むことができます。
  - 両方のチェック・ボックスが選択された状態のままにし、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 の管理ツールと開発ツールをインストールする。
  - 「**管理ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスを選択された状態のままにし、「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の管理ツールのみをインストールする。

    注: 開発ツールのみをインストールすることはできません。開発ツールをインストールするには、管理ツールもインストールする必要があります。
  - 両方のチェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の管理ツールと開発ツールがどちらもインストールされないようにする。

    ヒント: 最初に「**開発ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスを選択解除します。これにより、「**管理ツール**」項目の横にあるチェック・ボックスが使用可能になり、チェック・ボックスを選択解除できるようになります。

  「**次へ**」を選択します。

「アダプターのインストール」画面が表示されます。

5. 「アダプターのインストール」画面で、バージョン 4.3.1 のアダプターをインストール済みの場合は、各インストール済みアダプターの横にあるチェック・ボックスが選択され、使用不可の状態になっています。さらに、Adapter for JText をまだインストールしていない場合、このアダプターは System Test サンプルを実行するときに必要であるため、このアダプターはデフォルトで選択されています。(System Test サンプルは、ステップ 6 (79 ページ) で説明した、「サンプルのインストール」画面から選択できるサンプル・コンポーネントの一部です。) 以下のいずれかを実行します。

- すでにインストールされているアダプター以外にはアダプターをインストールしない場合は、「Adapter for JText」の横にあるチェック・ボックスを選択解除 (解除が必要な場合) して、「**次へ**」を選択します。
- すでにインストールされているアダプター以外にインストールするアダプターを Adapter for JText のみにする場合は、「Adapter for JText」の横にあるチェック・ボックスを選択した状態のまま、「**次へ**」を選択します。
- Adapter for JText およびインストール済みのアダプターに加えてその他のアダプターをインストールする場合は、「Adapter for JText」の横にあるチェック・ボックスを選択した状態のまま、追加する他のアダプターの横にあるチェック・ボックスを選択して、「**次へ**」を選択します。

「サンプルのインストール」画面が表示されます。

重要: アダプターは、必要な数だけインストールできます。ただし、WebSphere Business Integration Server Express Plus をインストールする場合、InterChange Server Express に登録できるアダプターの数は、最大で *5* つです。

6. 「サンプルのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。
   - バージョン 4.3.1 のサンプル・コンポーネントをインストール済みの場合は、「**サンプル**」という項目の横にあるチェック・ボックスが選択され、使用不可になっています。「**次へ**」を選択します。
   - バージョン 4.3.1 のサンプル・コンポーネントをインストールしていない 場合は、「**サンプル**」という項目の横にあるチェック・ボックスが選択され、使用可能になっています。次の 2 つのうち、いずれか一方の方法を選択して次に進むことができます。
     - 前述の項目を選択した状態で維持し、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントをインストールする。
     - チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントがインストールされていない状態を維持する。

     「**次へ**」を選択します。

   「ソフトウェア前提条件」画面が表示されます。

   注: サンプル・コンポーネントをインストールするには、InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter のインストールが必要です。そのため、サンプル・コンポーネントのインストールを選択すると、InterChange Server Express、Toolset Express、および JText Adapter は、ユーザーが前の画面でこれらのインストールを選択したかどうかにかかわらず、インストールされます。

7. 「ソフトウェア前提条件」画面では、インストーラーによって必要な前提条件が通知されます。以下のいずれかを実行します。
   - 「ソフトウェア前提条件」画面に、追加の前提条件が必要ないと表示された場合は、ステップ 8 (80 ページ) に進みます。
   - 「ソフトウェア前提条件」画面に、追加の前提条件ソフトウェアが必要であると表示された場合、前提条件ソフトウェアのインストール方法の説明につ

いては、ステップ 3 (13 ページ) を、追加の前提条件ソフトウェア情報については、 22 ページの『ソフトウェア前提条件』を参照してください。

8. 「ソフトウェア前提条件」の下部にある「**製品のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

   「ソフトウェア・ライセンス情報」画面が表示されます。

9. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**使用条件の条項に同意します**」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「**次へ**」を選択します。

   「アップグレード検査 (upgrade check)」画面が表示されます。

10. 「アップグレード検査 (upgrade check)」画面で、「**次へ**」を選択します。

    次のいずれかの処理が実行されます。

    - InterChange Server Express コンポーネントがすでにインストールされており、アップグレードされる予定であるか、またはアップグレード時に InterChange Server Express コンポーネントをインストールする場合、インストーラーは、適切な前提条件ソフトウェアが存在し、正常に構成されていることを検査します。このサーバー・マシンで使用できる物理的なプロセッサーの最大数は、2 つに制限されます。詳細については、製品のライセンス条件を参照してください。
      - 前提条件が満たされていない場合は、エラー・メッセージが表示され、インストールは強制的に取り消されます。
      - 前提条件が満たされた場合は、製品のインストールが開始します。この場合、ステップ 12 から手順を続行します。
    - InterChange Server Express コンポーネントがインストールされておらず、アップグレード時にはインストールされない予定の場合は、「ネーム・サーバー構成」画面が表示されます。この場合、ステップ 11 から手順を続行します。

11. 「ネーム・サーバー構成」画面で、InterChange Server Express コンポーネントをインストールした (またはインストールする予定の) コンピューターの IP アドレスを入力して、「**次へ**」を選択します。これにより、インストール・プロセスが開始します。ネーム・サーバーの詳細については、 21 ページの『「カスタム」インストールの追加情報』を参照してください。

12. インストール・プロセスが開始すると、インストーラーは、インストール用に十分なディスク・スペースがあるかどうかを検査します。
    - 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「**次へ**」ボタンが使用不可になります。この場合は、「**戻る**」を選択していくつかの機能またはサブ機能を選択解除するか、指定したドライブの不要なスペースを削除します。
    - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。多数の通知画面が表示されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストールの要約 (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。「**完了**」を選択して、GUI を終了します。

バージョン 4.3.1 の Adapter または Collaboration Capacity Packs for WebSphere Business Integration Express Plus がインストールされている場合は、これらの製品もバージョン 4.4 にアップグレードする必要があります。詳しくは、『Adapter Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から V4.4 へのアップグレード』および 83 ページの『Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から V4.4 へのアップグレード』のセクションを参照してください。

Adapter Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から V4.4 へのアップグレード

この手順により、インストール済みの 1 つ以上のアダプターを、バージョン 4.3.1 の Adapter Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus からバージョン 4.4 にアップグレードします。アップグレード時には、追加のアダプターをインストールすることもできます。以下の条件が満たされていることを前提としています。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.4 が、すでにマシンにインストールされています。
- アダプターをアップグレードするマシンに対して、ユーザーが管理者特権を持っています。
- アダプターをインストールするのと同じマシンに、WebSphere Business Integration Server Express V4.4 はインストールされていません。 (Adapter Capacity Packs は、既存の WebSphere Business Integration Server Express Plus 4.4 インストールでのみ使用できます。)
- アップグレードまたはインストールするアダプターが、現在または将来にわたり InterChange Server Expres と同じマシンに存在しない場合は、WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD07 のインストールが、アダプターをアップグレードまたはインストールするのと同じマシンに存在しています。
- アダプターのライセンスを正常に登録するため、InterChange Server Express は稼働している必要があります。また、リモート・マシンにインストールされている場合は、稼働状態で、かつ到達可能である必要があります。

Launchpad は、既存の Adapter Capacity Pack インストールからのアダプターのアップグレードをガイドする、GUI インストーラーの起動方法を示します。GUI インストーラーは、インストール済みのアダプターをアップグレードし、選択された場合は新規アダプターをインストールして、すべてのアダプターをサービスとして構成します。

Launchpad を呼び出して GUI インストーラーを起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の左側の列から、「**Capacity Pack のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

   2 つのボタンがある「Capacity Pack のインストール」画面が表示されます。
2. 「**Capacity Pack のインストール**」を選択して GUI を起動し、Adapter Capacity Pack をインストールします。

   「ようこそ」画面が表示されます。

3. 「ようこそ」画面で、「**次へ**」をクリックします。

   「ソフトウェア・ライセンス情報」画面が表示されます。

4. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**使用条件の条項に同意します**」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「**次へ**」を選択します。

   「アップグレード検査 (upgrade check)」画面が表示されます。

5. 「アップグレード検査 (upgrade check)」画面で、「**次へ**」を選択します。

   インストーラーは、このセクションの先頭に記載されている前提条件に適合しているかどうかを検査します。不適合条件がある場合は、「**キャンセル**」ボタンを選択してインストールを取り消すことを強制されます。すべての前提条件が適合していた場合は、「フィーチャー (Feature)」画面が表示されます。

6. 「フィーチャー (Feature)」画面には、まだインストールされていないアダプターのみが表示されます。以下のいずれかを実行します。
   - アップグレード中のアダプター以外にはアダプターをインストールしない場合は、「**次へ**」を選択します。
   - アップグレード中のアダプター以外にもアダプターをインストールする場合は、名前の横にあるラジオ・ボタンを選択して選択可能なアダプターのリストからアダプターを 1 つ選択し、「**次へ**」をクリックします。どのアダプターを選択するかの詳細については、43 ページの『インストールするアダプターの決定』のセクションを参照してください。

   次のいずれかの画面が表示されます。
   - InterChange Server Express がローカル・マシンにインストールされている場合は、「**次へ**」をクリックしてアップグレード・プロセスを開始します。
   - InterChange Server Express がリモート・マシンに存在する場合は、「サーバー IP アドレスの構成」画面が表示されます。この場合は、ステップ 7 に進んでください。

7. 「サーバー IP アドレスの構成」画面で、InterChange Server Express コンポーネントをインストールしたコンピューターの IP アドレスを入力します。InterChange Server Express が OS/400 マシンにインストールされている場合は、「**InterChange Server Express は OS/400 上にある**」という項目の横にあるチェック・ボックスを選択します。次に、「**次へ**」を選択します。次のいずれかの画面が表示されます。
   - 「**InterChange Server Express は OS/400 上にある**」という項目の横にあるチェック・ボックスを選択した場合は、「サーバー名の構成」画面が表示されます。この場合は、ステップ 8 に進んでください。
   - 「**InterChange Server Express は OS/400 上にある**」という項目の横にあるチェック・ボックスを選択しなかった場合は、「InterChange Server Express パスワード」画面が表示されます。この場合は、ステップ 9 (83 ページ) に進んでください。

8. 「サーバー名の構成」画面で、次の手順を実行します。
   a. OS/400 マシンの InterChange Server Express インスタンスの名前を入力します。(デフォルトは `QWBIDFT44` です。インスタンスに別の名前を付けた場合は、その名前を入力します。)

次に、「**次へ**」を選択します。

「プリインストールの要約 (Pre-installation Summary)」画面が表示されます。

9. 「プリインストールの要約 (Pre-installation Summary)」画面で、選択内容とインストールの場所を見直し、「**次へ**」をクリックします。

   インストーラーは、インストールに十分なディスク・スペースがあることを検査します。その後、インストールは次のように進行します。

   - 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「**次へ**」ボタンが使用不可になります。この場合は、「**戻る**」を選択して、指定のドライブ上の不要なスペースをいくつか削除する必要があります。
   - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。インストールと構成が完了すると、インストーラーは、このアダプターのライセンスを登録するためにサーバーへ接続しようとします。アダプターが正常に登録された場合は、メッセージ・ダイアログによって通知されます。逆に、登録が正常に完了しなかった場合は、エラー・ダイアログによって警告されます。
   - 「**OK**」を選択して、このダイアログを終了します。「ポストインストールの要約 (Post-installation Summary)」画面が表示され、プロセスが正常に実行されたか、または問題が検出されたことが示されます。

10. 「ポストインストールの要約 (Post-installation Summary)」画面で、「**完了**」を選択して、インストール GUI を終了します。

バージョン 4.3.1 の Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Express Plus がインストールされている場合は、これらの製品もバージョン 4.4 にアップグレードする必要があります。詳しくは、『Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から V4.4 へのアップグレード』のセクションを参照してください。

Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から V4.4 へのアップグレード

この手順により、バージョン 4.3.1 の Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus をバージョン 4.4 にアップグレードします。以下の条件が満たされていることを前提としています。

- Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 がマシンにすでにインストールされており、今度は V4.4 をインストールします。
- Collaboration Capacity Pack をアップグレードするマシンに対して、ユーザーが管理者特権を持っています。
- Collaboration Capacity Pack は、InterChange Server Express コンポーネントがインストールされているマシンと同じマシンにインストールします。
- InterChange Server Express コンポーネントは稼働していません。

Launchpad は、既存の Collaboration Capacity Pack インストールのアップグレードをガイドする、GUI インストーラーの起動方法を示します。Collaboration Capacity Pack GUI により、選択したコラボレーション・グループがアップグレードされ、インストール済みの内容が InterChange Server Express に配置されます。

Launchpad を呼び出して GUI インストーラーを起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の左側の列から、「**Capacity Pack のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。2 つのボタンがある「Capacity Pack のインストール」画面が表示されます。
2. 「**Collaboration Capacity Pack のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択して GUI を起動し、Collaboration Capacity Pack のコラボレーションをインストールします。Launchpad は、最初に、WebSphere Business Integration Server Express Plus の InterChange Server Express コンポーネントがローカル・マシンにインストールされているかどうかを検査します。次に、以下のように動作します。
   - InterChange Server Express コンポーネントがローカル・マシンにインストールされていない場合は、インストールが失敗する可能性があることを警告ダイアログによって警告します。「**キャンセル**」を選択してインストールを取り消すか、または「**インストール**」を選択して、インストールを継続します。インストールの継続を選択した場合は、「ようこそ」画面が表示されます。
   - InterChange Server Express コンポーネントがローカル・マシンにインストールされている場合は、「ようこそ」画面が表示されます。
3. 「ようこそ」画面で「**次へ**」を選択します。

   「ソフトウェア・ライセンス情報」画面が表示されます。
4. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**使用条件の条項に同意します**」という項目の横にあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「**次へ**」を選択します。

   インストーラーは、このセクションの先頭に記載されている前提条件に適合しているかどうかを検査します。不適合条件がある場合は、「**キャンセル**」ボタンを選択してインストールを取り消すことを強制されます。すべての前提条件が適合していた場合は、「アップグレード検査 (upgrade check)」画面が表示されます。
5. 「アップグレード検査 (upgrade check)」画面で、インストール済みの Collaboration Capacity Pack をアップグレードすることを確認したら、「**次へ**」を選択します。

   インストーラーは、インストールに十分なディスク・スペースがあることを検査します。その後、インストールは次のように進行します。
   - 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「**次へ**」ボタンが使用不可になります。この場合は、「**戻る**」を選択して、指定のドライブ上の不要なスペースをいくつか削除する必要があります。

- 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストールの要約 (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。

6. ユーザー名とパスワードを入力して、「ユーザー ID およびパスワードを保管」チェック・ボックスを選択します。このユーザー名とパスワードは、Launchpad インストール・プロセス中に「RBAC」画面で入力したユーザー名とパスワードと同じにする必要があります。
7. 「ポストインストールの要約 (Post-installation Summary)」画面で、「**完了**」を選択して、GUI を終了します。

新規のアップグレード・バージョンの始動

アップグレードを完了したら、以下の手順に従い、リポジトリーの既存バージョンを使用して、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムを始動することができます。

1. 必要なすべてのサポート・ソフトウェアが稼働していることを確認します。サポート・ソフトウェアの内容は、次のとおりです。
   - WebSphere MQ (Queue Manager および Listener の両方が稼働中であることを確認してください)。 詳しくは、 29 ページの『WebSphere MQ サービスへのリスナーの追加』を参照してください。
   - データベース・サーバー。
2. InterChange Server Express を始動します。このコンポーネントを始動すると、永続的ネーミング・サーバーも自動的に始動します。

   InterChange Server Express の始動方法については、 35 ページの『WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動』を参照してください。

ProductDir ディレクトリーの `InterChangeSystem.log` ファイルを調べると、始動が正常であったことを確認できます。

注: システムのアップグレード後に InterChange Server Express の始動に失敗した場合は、このアップグレード手順を調べて、すべての指示に従ったかどうかを確認してください。それでも失敗の原因が不明であれば、修正しようとしたり、バックアップから復元する前に、IBM テクニカル・サポートにお問い合わせください。

アップグレードの検証

アップグレードが正常に処理されたかを検証するには、リポジトリー・スキーマが作成され、すべてのオブジェクトが正常にロードされたかどうかを確認します。System Manager が稼働しているマシンで、次の作業のいくつかを実行する必要があります。

- WebSphere MQ キューが、エラーがなく正常に作成されロードされていることを検証します。System Manager の「サーバー」メニューから「統計」を選択して、すべてのキューが適切な場所にあることを確認します。

- すべてのコネクターが指定のキューを正常に検索したことを検証します。System Manager の「サーバー」メニューから「システム表示」を選択して、コネクターの横のアイコンが青信号になっていること、およびコネクターの状況が「非アクティブ」であることを確認します。
- すべてのコネクターとビジネス・オブジェクトが System Manager に正常に表示されることを確認します。
- System Manager の「ツール」メニューから「Log Viewer」を選択して、ログ・ファイルのエラーをチェックします。

  重要: ログ・ファイルにエラーが存在する場合は、そのエラーを解決してから、作業を継続してください。

Quick Validate プロシージャーを実行することにより、アップグレードが正常に実行されたかどうかも確認できます。このプロシージャーの命令は、First Steps インターフェースの「Quick Validate」ボタンをクリックすると開始できます。詳細については、 39 ページの『第 5 章 インストールの検証』を参照してください。

アップグレード・バージョンのテスト

アップグレードしたシステムを開発から実動に移行する前に、IBM では、実動時のすべてのインターフェースおよびビジネス・プロセスについてテストを行うことをお勧めします。システムのテストでは、以下の項目について調べます。

- コネクター: 各コネクターを始動して、コネクターの接続性をテストします。構成変更が行われていることを確認してください。コネクター・ログ・ファイルでは、コネクターが指定のアプリケーションに接続できることを確認します。
- スクリプトおよびストアード・プロシージャー: スクリプトおよびストアード・プロシージャーは、アップグレードされた場合のみテストする必要があります。スクリプトは、新規ディレクトリー・パス・ロケーションを含むように変更する必要があります。
- ボリュームおよびパフォーマンス: 過去にパフォーマンス測定が行われていれば、新たにパフォーマンス測定を行い、両方の結果を比較して、システムが安定していることを確認します。

アップグレード・バージョンのバックアップ

アップグレード・プロセスが完了したら、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムのバックアップを作成します。 67 ページの『システムのバックアップ』を参照してください。

次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus へのアップグレードは完了しました。WebSphere Business Integration Server Express Plus をアップグレードした後、オプションのアダプターまたは Collaboration Capacity Pack をインストールする場合は、 41 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』または 45 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』を参照してください。

付録. サイレント・インストールおよびアンインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus、Adapter Capacity Pack、または Collaboration Capacity Pack のインストールおよびアンインストールは、提供されている GUI を使用せずに実行できます。サイレント・インストールおよびアンインストールは、コマンド行から実行します。

サイレント・インストールでは、通常、インストーラーの実行時に手動で指定する応答は、付属のテンプレート応答ファイルに格納されます。このファイルは、その後コンポーネントをインストールする実行可能プログラムによって読み取られます。実行可能プログラムを実行する場合は、先にこの応答ファイルに必要な変更を必ず実行してください。設定可能なオプションについて記述している資料は、各ファイル内にあります。

サイレント・アンインストールでは、応答ファイルの使用が必要な場合とそうでない場合があります。

この章の内容は以下のとおりです。

- 『WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール』
- 88 ページの『WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・アンインストール』
- 88 ページの『Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール』
- 89 ページの『Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール』
- 89 ページの『Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール』
- 89 ページの『Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストール』

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus をサイレント・インストールするための応答ファイルは、CD ルートの `Launchpad` ディレクトリーに置かれており、次のように名前が付けられています。

- WebSphere Business Integration Server Express のサイレント・インストールの場合:
  - `WBIServerExpressResponseFile.txt`
  - `WBIServerExpressResponseFile_WIN2K3.txt`
- WebSphere Business Integration Server Express Plus のサイレント・インストールの場合:
  - `WBIServerExpressPlusResponseFile.txt`
  - `WBIServerExpressPlusResponseFile_WIN2K3.txt`

サイレント・インストールを実行するには、以下の手順を行います。

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

1. 必要な前提条件やインストール・オプションを十分理解するため、 7 ページの『第 3 章 必要なソフトウェア前提条件と WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール』に説明されている前提事項や GUI によるインストール手順を熟読します。設定可能なオプションについて記述している資料は、応答ファイル内にもあります。
2. 応答ファイルを CD メディアから任意のディレクトリーにコピーし、インストール環境に必要な設定に合わせて変更します。
3. 変更した応答ファイルが格納されているディレクトリーに移動します。
4. 次のコマンドを発行します。

   ```
   CD_drive_letter¥Launchpad¥setupwin32.exe -silent -options <response_file_name>
   ```

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・アンインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のすべてのコンポーネントをサイレント・アンインストールするには、次の手順を実行します。

1. WebSphere Business Integration Server Express のインストール環境にあるディレクトリー *ProductDir*¥_uninstWBIServerExp44 から、WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境にあるディレクトリー *ProductDir*¥_uninstWBIServerExpPlus44 に移動します。
2. 次のコマンドを発行します。

   ```
   uninstaller.exe -silent
   ```

注: C:¥IBM¥WebSphereServer ディレクトリーは、場合によっては手動で削除する必要があります。

Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール

Adapter Capacity Pack のサイレント・インストールの実行時に使用される応答ファイルの名前は、adaptercp_silent.txt で、このファイルは、CD のディレクトリー Launchpad¥AdapterCapacityPack に置かれています。

サイレント・インストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. 必要な前提条件やインストール・オプションを十分理解するため、 41 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』に説明されている前提事項や GUI によるインストール手順を熟読します。設定可能なオプションについて記述している資料は、応答ファイル内にもあります。
2. 応答ファイルを CD メディアから任意のディレクトリーにコピーし、インストール環境に必要な設定に合わせて変更します。
3. 変更した応答ファイルが格納されているディレクトリーに移動します。
4. 次のコマンドを発行します。

   ```
   CD_drive_letter¥Launchpad¥AdapterCapacityPack¥setupwin32.exe -silent   /
   -options adaptercp_silent.txt
   ```

Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール

Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストールの実行時に使用される応答ファイルの名前は、`adaptercp_silent_uninst.txt` で、このファイルは、CD のディレクトリー `Launchpad¥AdapterCapacityPack` に置かれています。

サイレント・アンインストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. ディレクトリー *ProductDir*¥_uninstAdapterCP44 に移動します。
2. 次のコマンドを発行します。

   ```
   uninstaller.exe -silent
   ```

Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール

Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストールの実行時に使用される応答ファイルの名前は、`collabcp_silent.txt` で、このファイルは、CD のディレクトリー `Launchpad¥CollabCapacityPack` に置かれています。

サイレント・インストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. 必要な前提条件やインストール・オプションを十分理解するため、45 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に説明されている前提事項や GUI によるインストール手順を熟読します。設定可能なオプションについて記述している資料は、応答ファイル内にもあります。
2. 応答ファイルを CD メディアからコピーし、インストール環境に必要な設定に合わせて変更します。
3. 変更した応答ファイルが格納されているディレクトリーに移動します。
4. 次のコマンドを発行します。

   ```
   CD_drive_letter¥Launchpad¥CollabCapacityPack¥setupwin32.exe -silent   /
   -options collabcp_silent.txt
   ```

Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストール

Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストールを実行するには、次の手順を実行します。

1. ディレクトリー *ProductDir*¥_uninstCollabCP に移動します。
2. 次のコマンドを発行します。

   ```
   uninstaller.exe -silent
   ```

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。 本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。 IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態で提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
577 Airport Blvd., Suite 800
Burlingame, CA 94010
U.S.A

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。 IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があり、単に目標を示しているものです。本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。著作権表示: 本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報 (提供されている場合) は、プログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する際に役立ちます。一般使用プログラミング・インターフェースにより、お客様はこのプログラム・ツール・サービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

警告: 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。
i5/OS
IBM
IBM ロゴ
AIX
CICS
CrossWorlds
DB2
DB2 Universal Database
IMS
Informix
iSeries
Lotus
Lotus Domino
Lotus Notes
MQIntegrator
MQSeries
MVS
OS/400
Passport Advantage
SupportPac
WebSphere
z/OS
Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。
MMX および Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。
Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。
Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。
他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus には、Eclipse Project (http://www.eclipse.org/) が開発したソフトウェアが含まれています。

WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.4 および WebSphere Business Integration Server Express Plus バージョン 4.4。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アップグレード
- アップグレードされたバージョンの始動 85
- アップグレード・バージョンのテスト 86
- 既存システムの準備 62
- 検証 85
- サポートされるアップグレード・シナリオと前提事項の特定 61
- システムのシャットダウン 68
- システムのバックアップ 67
- システムを静止状態にする 66
- 失敗のチェック 85
- Adapter Capacity Pack 81
- Collaboration Capacity Pack 83
- WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3 から Express Plus V4.3.1 へ 76
- WebSphere Business Integration Server Express V4.3 から Express V4.3.1 へ 72
- WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 から Express Plus V4.3.1 へ 68

アップグレード、ソフトウェア前提条件の 64

アンインストール
- Adapter Capacity Pack 44
- Collaboration Capacity Pack 48
- WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus 33

インストール
- 概要 1
- Adapter Capacity Pack 41
- Collaboration Capacity Pack 45

応答ファイル
- Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール 89
- Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール 88
- Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール 89

応答ファイル *(続き)*
- WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール 87

[カ行]

「カスタム」インストール 17

管理
- InterChange Server Express 36
- WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus 35

既存のユーザー・プロジェクトの保存アップグレード 62

起動
- Launchpad 4

「クイック・スタート・ガイド」、表示 39

[サ行]

再始動、InterChange Server Express の 37

サイレント
- Adapter Capacity Pack のアンインストール 89
- Adapter Capacity Pack のインストール 88
- Collaboration Capacity Pack のアンインストール 89
- Collaboration Capacity Pack のインストール 89
- WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール 88
- WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストール 87

始動
- InterChange Server Express 35
- System Manager 36
- WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus 35

ソフトウェア前提条件 22

[タ行]

次のステップに進む
- システムのアップグレード 39

次のステップに進む *(続き)*
- ソフトウェア前提条件の検査およびインストール 5
- Adapter Capacity Pack のインストール 39, 86
- Collaboration Capacity Pack のインストール 39, 44, 86
- Launchpad の基本機能の学習 2
- WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus インストールの検証 37
- WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus の始動 34

データベース、インストールおよび構成 23

登録、InterChange Server Express の 36

[ハ行]

パスワード、InterChange Server Express、変更 37

表記上の規則 vi

「標準」インストール 11

[ラ行]

リスナー、WebSphere MQ サービスへの追加 29

ログ・ファイル、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus インストール 31

A

Adapter Capacity Pack
- アップグレード 81
- サイレント・アンインストール 89
- サイレント・インストール 88
- GUI を使用したアンインストール 44
- GUI を使用したインストール 41

C

Capacity Pack
- アダプター 41
- コラボレーション 45

Collaboration Capacity Pack
- アップグレード 83
- サイレント・アンインストール 89

© Copyright IBM Corp. 2004, 2005

Collaboration Capacity Pack *(続き)*
サイレント・インストール 89
GUI を使用したアンインストール 48
GUI を使用したインストール 45
Collaboration Enablement for Portal の構成 58

D

DB2
最小基準 24

F

Failed Event Manager
手動構成による Tomcat の使用 57
ディレクトリーのロケーション 32
Web サーバー使用時の構成 53
Web サーバー不使用時の構成 54
First Steps、起動および使用 26

I

IBM DB2 v8.2 Express 24
InterChange Server Express
管理 36
再始動 37
始動 35
登録 36
パスワードの変更 37
System Manager への接続 36

L

Launchpad
「クイック・スタート・ガイド」の表示 39
Adapter Capacity Pack のインストール 41
Collaboration Capacity Pack のインストール 45
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストール 11

M

Microsoft SQL Server 2000 25
最小基準 25

S

System Manager
始動 36
System Manager *(続き)*
InterChange Server Express への接続 36
System Monitor
手動構成による Tomcat の使用 56
ディレクトリーのロケーション 32
Web サーバー使用時の構成 53
Web サーバー不使用時の構成 54

T

Tomcat
Tomcat を使用するための Web ベース・ツールの構成 56

W

Web Deployment
ディレクトリーのロケーション 32
Web サーバー使用時の構成 53, 54
Web サーバー不使用時の構成 54
Web ブラウザーのインストール 25
Web ベース・ツール
System Monitor、Failed Event Manager、Web Deployment の構成 53
System Monitor、Failed Event Manager、Web Deployment、および Collaboration Enablement for Portal による構成 52
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus
アップグレード 61
インストールの検証 39
管理 35
サイレント・アンインストール 88
サイレント・インストール 87
始動 35
ディレクトリー構造 30
GUI を使用したアンインストール 33
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストールの検証 39
WebSphere MQ
リスナーの追加 29
Windows 2003 で使用可能なコンポーネント 9
Windows XP で使用可能なコンポーネント 10

Printed in Japan

日本アイ･ビー･エム株式会社
〒106-8711　東京都港区六本木3-2-12